Walt Disney's
Pinocchio

目　　　次

「ピノキオ」(ウオルト・ディズニ／９４０年度作品)

採録　佐々川　克二

広江　武

メイン・タイトル「ＰＩＮＯＣＣＨＩＯ」
　歌詞・訳詞・三木鶏郎(日本語版によるもの)
スタッフ・タイトル
・タイトルが消えてＦ・Ｉするとコオロギのジミニー・クリケットが大きな本の上で歌っている。
ジミニー♪星に祈れば　願いがかなう
　どんな願いも　かなうよ
　夢みる心　はねをのばせば
　いつかくるくる　この世に
　やがて愛の女神
　願いごとを　かなえるよ
　夜空の星が　するする降りて
　どんなことでも　かなうよ♪
・ジミニー、こちらを向いて言う――。
ジミニー「やあ、皆さん、願かけなんて信じていない人が多いでしょうね。私がそうでした。それが変りました。ええ、もちろん私は一介の旅のコオロギに過ぎませんが、まあ聞いて下さい。私がどうしてそんなふうに気持が変ったかってことを…」
・ジミニー、おりてきて本のページを開く。本のタイトルは「ピノキオ」である。
ジミニー「以前、ある晩のこと…、私は…」
・本のページがめくれてきて、しまりそうになるので、ジミニーあわてて押える。
ジミニー「失礼、これを押えます」
・ロウソク立ての柄で本を押える。

ジミニー「ずっと以前のある晩のことでした。小さな町にやって来ました。とてもいい晩で、家々の上の夜空には星が輝いて、まるで絵の様な美しさでした」

・夜の景色、横に移動する。

ジミニー「曲りくねった道には人影は見えず、ただ一軒ジペットと言う名の木彫り細工人の家だけに灯がともっていました。そばへ行き……」

・ジミニーの跳ねてゆく動きでジペットの家の窓に近付く。

ジミニー「そして、のぞきました」

・暖炉の火が暖かそうに燃えている。

ジミニー「火が無駄になるのはもったいない。どうしょう？私は言った」

・ジミニー、お尻から先に、ドアの下のすき間から入りこむ。

ジミニー「そして見回した。勝手を知らないから気味が悪い。用心が大切」

。ジミニー、ちょこちょこ走って行ってシャベルのかげにかくれる。

ジミニー「誰も居ない。私はくつろいだ」

・ジミニー、ステッキの様に傘を振り回しながら火のそばに歩いて行く。

・暖炉から小さな石炭のかたまりを傘の柄で引っかけて取り出し、お尻を乾かす。

ジミニー「火にあたりながら見回わしました。奇妙な家で彫物をした時計が壁いっぱいにかかっていました」

。おかしな時計が沢山並んで、チクタク時をきざんでいる。

ジミニー「どの一つも素敵なオルゴールや素晴しいおもちゃがいっぱいに並べられています。名作です。そして目についたのは人形です」

・まだ眉と口の描かれていない小さな男の子の人形です。

ジミニー「例の糸のついた芝居の操り人形です」

。ジミニー、人形の前にのぼって糸を引っぱる。

ジミニー「可愛いいね。フフフ、リンリン」

・そこへ、ジペットの声が聞こえて来る。

・ジミニー、あわててかくれる。

ジペット「さあ、もうじきだ。あと少し塗れば全てお終いだょ」

・階段を猫のフィガロとジペットが降りて来て人形の前に行く。

ジペット「我ながらよく出来たな。どうだいフィガロ」

・〝小さな木の頭〟の歌を鼻歌まじりで歌いながら眉を描く。

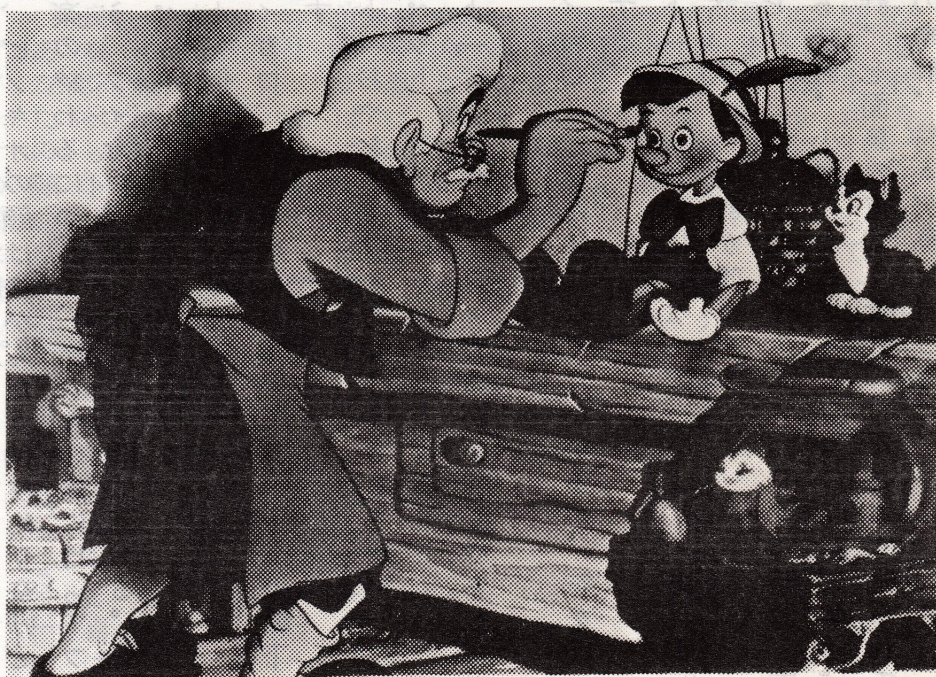
・その筆を金魚のクレオの入った金魚鉢のそばの水入れで洗う。

。ジミニー、つられて出て来てのぞくが、自分の寄りかかっている物が貴婦人（人形）のお尻だとわかって驚いて手を引っこめる。

ジミニー「す、すみません」

・ジペット、口を描く。

ジペット「見違える様だ。とても素晴らーしーい！とても素晴らしい」

。ジミニーも大いに共鳴するが、横に怖い顔の彫物がある

のを見て驚く。

ジペット「さて、お前にうってつけの名前がある。ピノキオだ！　気に入ったかいフィガロや？」

・フィガロ、顔をしかめて首を横に振る。

ジペット「よくないと？　クレオどうだね」

・クレオも首を横に振る。

ジペット「じゃあ、この小僧にまかせよう。好きかね」

・ジペット、自から人形の糸を振るので人形うなずく。

ジペット「ワッハッハ、じゃ決った。ピノキオだ」

・ジミニー、口を押えてクスクス笑う。

ジペット「さて、お前を試してみよう。先生、音楽を頼みます」

・ジペット、オルゴールのネジを巻いて回る。ジミニー驚いてその下へ。

・四人の音楽師をのせたオルゴールの指揮者がバトンを振ると〝小さな木の頭〟のメロディが鳴り出す

・歯車やネジが回り出して、オルゴールの下にかくれたジミニーは散々な目に遇う。

ジミニー「やめろ！　わあ、気をつけろ！」

・ジペット、ピノキオを操って踊り出しながら歌う。

ジペット♪小さな木の頭は　松の木生まれ
光る眼をした　木の人形
小さな木のつめ　伸びはせず
小さな木の鼻　かめもせず
小さな足も　木の足で
転んだ時の　用心に

小さな腰は　木の腰だ♪

・ジミニーも声を合わせる。

・ピノキオ踊っている。金魚鉢の中から見るとレンズ効果で、ピノキオの顔はゆがんだり伸びたり奇妙に見える。

・音楽の終わるにつれて、ピノキオ床にはってフィガロを追う。

・ジペット、ピノキオを抱き上げて、壁と床のすき間に落ちる。

ジペット「何て可愛いいんだろ！」

・フィガロ、ニャゴニャゴ鳴いてジペットの靴下をずり落とす

ジペット「おやおや、フィガロ！やきもちかい」

・ジペット、フィガロをつまみ上げる。

ジペット「ピノキオや、フィガロがお前にやきもちやいてるよ」

・フィガロ、ピノキオになぐりかかるが、空を切って一回転する。

ジペット「フィガロ気にしなくていいよ：、あれ！」

・突然、沢山の時計が鳴り出す。

・アヒルが二羽、出たりすっこんだりする時計。蜜蜂のうなる時計。小鳥のお母さんとひなの時計。酔っぱらいの時計。七面鳥の首切り時計。お母さんに叱られている子供の時計。狩人が鳥を射つ時計。

ジペット「一体、何時だろう」

・二人の男が乾杯している懐中時計を出して見る。

ジペット「おや、遅くなったぞ、さぁベッドへ行こう。おやすみピノキオ。さあフィガロや」

・フィガロ、台の上から降りかける

ジペット「おやすみクレオ、クレオ、私の可愛いいウォーター。ベビィちゃん。フィガロ、クレオにおやすみを言いなさい」

・フィガロ、顔をしかめて金魚鉢をなめる。クレオ喜ぶ。

ジペット「じゃおやすみ。小さな人魚さんや」

・クレオ、可愛いい家形の巣に入る。

・ジペット、ベッドに寝ている。フィガロも小さなベッドに入る。

ジペット「全く見事だ。まるで生きている様じゃないか。おや、馬鹿な話だわい。寝るとしよう」

・ジペット、ロウソクを消してもぐりこむ。

ジペット「あれ、フィガロ、窓を開けるのを忘れた」

・フィガロ、仏頂面で起き出してジペットのベッドの上を通って窓にしがみついて登り、苦心して窓を押し開ける。

ジペット「あっ！見ろ見ろフィガロ！願い星だ！」

・夜空に願い星が輝いている。

・ジペット　ひざまづいて祈る。

ジペット「星さん、星さん、一番星を今夜見た。私の願いをかなえておくれ。フィガロに、いい願いをかけたよ。ピノキオが本当の少年になります様に。本当の少年にね」

ジミニー「確かにいい願いだが、ちょっと実際的じゃないね」

ジペット「本当の少年にな：」

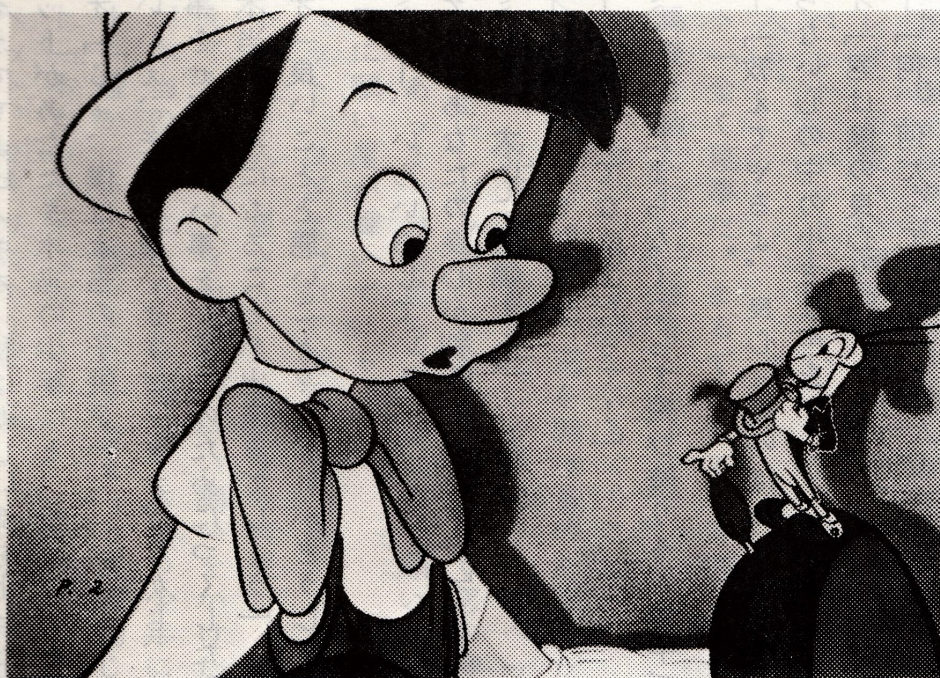
・ジペット、フィガロをなでてやっているうちに眠ってしまう。フィガロ、ジペットの横にもぐり込む。

ジミニー「さて、寝るほどの楽はなしだ」

・ジミニー、靴を脱ぎ、寝てしまう。

・シンと寝静まった夜の町に星だけが光り輝いている。
・数多くの時計がチクタク、カチコチ鳴っている。
・ジミニー、この音が気になって眠れない。
・砂時計の砂が落ちてカチンコチンと鳴る。金魚のクレオがいびき代りにブクブクあぶくをたてる。ジミニー、時計の様子を目で追っているうちに、目が変になって来る。ジミニー頭を振る。ジミニー、為にたまらなくなって帽子を耳までかぶる。
・途端にグー、ピューと言うものすごい音が聞こえて来る。
・ジペットの大いびきである。
ジミニー「うるさいっ!」
・途端に時計も何もかも鳴り止む。
ジミニー「ふん!程度があらぁ」
・どこからか美しい音楽が……。
ジミニー「今度は何だ?」
・星の光がまばゆい位に窓の中に射し込んで来る。
・ジミニー、あわてて一切合切拾い集めて物かげへとび込む。
・星のまばゆい光の中に女神の姿が現われる。
ジミニー「あれは女神様だぞ!」
女神「善良なジペットよ。あなたは多くの人々を喜ばせましたから、あなたの願いをかなえてあげましょう」
・女神、ピノキオの前に進む。
女神「小さな木の人形よ。目を開けなさい」
・まばゆい光がピノキオの体のまわりに輝き、ピノキオ動き出す。

ピノキオ「やあ、僕は動ける。それに話も出来る。歩けるよ」
・立ち上りかけてひっくり返る。
女神「そうですよピノキオ。私は新しい命を上げたのです。ジペットがあなたを本当の少年にと、祈ったからです」
ピノキオ「じゃ、僕は本当の子供?」
女神「いいえ、それは違いますピノキオ。しかし、あなたが悪い事をせず、良い事をして人のためにつくしたなら、いつか本当の少年になることが出来るでしょう」
ピノキオ「良いことと悪いこと? それがどうしてわかるの?」
・ジミニー、いらいらしている。
女神「それはあなたの良心が判断するのです」
・ジミニー、大いに共鳴する。
ピノキオ「良心ってなに?」
ジミニー「良心ってなに?だって!」
・ジミニー、たまらなくなって飛び降りる。途中で傘が開く。
ジミニー「教えてやるよ。良心ってのはね、誰もあまり聞きたがらない心の中の小さな声を」
ピノキオ「君は僕の良心?」
ジミニー「何、何だって?」
女神「あなたはピノキオの良心になってあげる?」
・女神、顔をジミニーに近寄せる
女神「どう?」
ジミニー「ええ? え、いいですよ」
女神「あなたの名前は?」

ジミニー「え？　あ、クリケットです。ジミニー・クリケット」
・ジミニー、たちまち真赤になってネクタイをゆるめてうなづく。
女神（笑って）「クリケットさん、ひざまずきなさい」
・女神、光る杖をジミニーの頭に近付ける
・光がまぶしく輝く。
女神「あなたをピノキオの良心にします」
・光り輝く中で、ジミニーちょっと目を開ける。
女神「さあ、ジミニー・クリケットお立ち」
・今までのボロ服が消えて素晴しい服に着せ替えられている。
女神「ジミニーさん、ピノキオを正しく導いて下さいよ」
ジミニー「引き受けました。だけどメダルをもらえませんか」
女神「そうね、多分あげられるわ」
ジミニー「すごい！　金のやつを？」
・女神うなずく。
女神「じゃ、ピノキオ、しっかり人のためにつくすのですよ。
良心を支えにしてね」
・再び美しい音楽につれてまぶしい光が女神の体をつつみ
消え去る。
ジミニーとピノキオ「さよなら、女神様、さようなら！」
・ジミニー、自分の姿を得意気にツボの水に写しながら
御機嫌で鼻歌を歌っている。ピノキオのぞきこむ。
ジミニー「やあ、なんとなんと。君のこと、すっかり忘れてた。さてと、ピノック、それじゃ腹を割って君と少し話を

しよう。坐りたまえ。本当の子供になりたいんだろ？」
・ピノキオ、どしんと坐る。
ジミニー「ええ、君、つまり世の中には誘惑と言うものがあ
る」
ピノキオ「ユーワク？」
ジミニー「うん、そうだ。誘惑だ。つまり、ええと、世の中
には良い事が悪い事に見えたり、悪い事が良い事に見える
ことがあるんだ。ええと、わかるかね」
・ピノキオ、首を横に振る。
ピノキオ「良い事するよ」
ジミニー「そうだ、それでいい。それで、もし良心の助けが
必要な時は口笛を吹くんだ。こんな具合に」（口笛吹く）
ピノキオ「こんなに？」（吹くが鳴らない）
ジミニー「いやいや、こんな具合に」（吹く）
ピノキオ「こんな具合に？」（鳴らない）
ジミニー「いや、こんな風に」（三度吹く）
ピノキオ「こんなに」（三度目に鳴る）
ジミニー「そうだ、その調子、さあ歌おう」
♪困った時には　どうすりゃいい
口笛吹け（口笛）口笛吹け（ピノキオ吹く）
誘惑されたら　どうすりゃいい
口笛吹け（帽子に声を吹きこんで手を締めてあけ
る）口笛吹け
口笛届かぬ時には名前を呼びなさい（ピノキオ
さけぶ）「ジミニー・クリケット」
口をつぼめて吹いてみな
駄目な時はね、そう
口笛　世の中同じこと
まっすぐ吹けまっすぐ行け
で良心の声を聞こう♪
・ジミニー、バイオリンの弦の上を滑る。
・弦が切れてジミニーはねとばされる。
傘を笛にして吹く。煙草の葉のにおいにむせて、下に落
ちる。のこぎりの刃の上に落ち、二、三度はずんで時計
の前に飛び上る。ジミニー、時計の針を合わすと、沢山人形が出て
来る。ジミニー、可愛い女の子の人形にウィンクし
女の子について行ってドアにぶつかる。
ピノキオ「良心の声を聞こう」（歌う）
・ピノキオ、足に空きカンを引っかけて下に落ちる。
ジミニー「ピノッック気をつけて！」
ジペット「だ、だれだ！」
ピノキオ「僕です」
ジペット「ああ、僕か。（寝かける）な、なんだと？」
ジペット「だ、だれかいるぞ」
・ジペット、震えながらマッチをすり、ロウソクに火をつ
け、枕の下からピストルを取り出す。
・フィガロも後に続く。
ジペット「気をつけろ！とびかかってくるぞ」
・フィガロ、驚いてジペットの陰にかくれる。
・ジペットとフィガロは足を揃えて隣りの部屋へ。
ジペット「ど、どこに居るんだ！」
ピノキオ「（ジペットの足もとで）ここだよ」

・フィガロ、ギャーとさけんでジペットにとびつく。ピストル暴発。
・突然、時計が一せいに鳴り出す。
・驚くジペットの顔。フィガロが帽子の中から顔を出す。
ジペット「なんだピノキオ、お前か。どうしてこんなところへ落ちたんだ」
・ピノキオを抱きあげて台の上へ。
ジペット「し、しかしお前は話が出来るな！いやいや、そんな筈はない。わしは夢を見てるんだ」
ピノキオ「僕はしゃべれるよ。おまけに動けるよ！」
ジペット「いやいやそんな事はない。こりゃ夢だ」
ピノキオ「ちがうよ、本当だよ」
ジペット「ちがう！ちがう！ちがう！」
・水をかぶる。フィガロにもかかる。
ジペット「これでいい。さあ気がついたぞ。どうだ、もう一ぺんなんかしゃべってごらん！」
ピノキオ「（フフフと笑って）騒いだりしておかしいや」
ジペット「や！ 本当に物が言えるね。これは夢じゃない！
私の願いがかなったんだ」
ピノキオ「女神様が命をくれたんです。それに良心もあるよ
いつか本当の少年になれるんだ」
・ジミニー、得意気にうなづいている。
ジペット「私の夢が本当になったんだ」
・フィガロ、すっかり安心したのか手をなめている。
ジペット「フィガロだよ」
・ピノキオ、フィガロをなぜてやる。

・金魚鉢の中で、クレオがアブクを出している。
ジペット「ああ、お前を忘れてた。可愛いいキントトだろ」
・ピノキオが金魚鉢の水を指でかき回すと、クレオ飛び上ってピノキオにキスする。
・もう一度飛び上って、今度はフィガロにもキス。フィガロ妙な顔をする。
ジペット「さあ音楽だ。（オルゴールのボタンを押して回わる）お前もこれを押してごらん」（ピノキオを抱き上げてボタンを押させてやる）
・フィガロもボタンを押して回わる。
・ジペットとピノキオ踊り出す。
・フィガロ、小鳥のオモチャを眺めている。
・ジミニーも御機嫌で、貴婦人と紳士の人形が踊っている中へ入っていく。
ジミニー「（貴婦人と踊りながら）次の回は休まない？」
・と言っている間に、紳士の人形が戻って来て、ジミニーは二人の間にはさまれる。
・ジペット、歌を歌いながらオモチャを集めている。
ジペット「これはみんなお前のオモチャだよ」
・その間にピノキオはロウソクの火をいじって遊んでいる。
・フィガロも手を出してみる。
・ピノキオの指に火がつく。
ピノキオ「見てよ！きれいだよ！」
・これを見たジペット、仰天してオモチャを投げ出してしまう。
・ジペット、ピノキオを抱きかかえてわめき出す。

ジペット「大変だ！　水だ！　水だ！」
ジミニー「（帽子に水を入れて）水、水、水ですよ！」（と言って走っている間に、つまづいてひっくり返える。
・ジペットは、ピノキオの指をクレオの金魚鉢につっこむ。
・ジューッと言がして水の中に黒煙がひろがっていく。
ジペット「ああ、危ぶなかった。もう火をオモチャにしてはいけないよ。さあもう寝るとしよう」
・クレオの鉢の中の水は真っ黒である。クレオ顔を水上に出して煙の輪をはき出す。
・ピノキオをはさんで、ジペットとフィガロがベッドに寝ている。
ジペット「さあ、早く寝るんだよ。明日は学校だからな」
ピノキオ「なぜ寝るの？」
ジペット「人間は誰でも寝るのさ。フィガロも、クレオもな。さあ目をつぶって：：」
ピノキオ「なぜ目をつぶるの？」
ジペット「それは――ね」（すでにジペットは眠ってしまっている）
ピノキオ「なぜ？」
・静かに夜は更けてゆく。
・その翌朝。小さな町の教会の鐘が鳴りわたる。
・子供達が家から出て来る。
・こちらの道ではアヒルを追う女が歩いて来る。家から出て来た子供が母親に鼻をかんでもらい、キスしてとんでいく。男の子が池に船を浮かばせている。一人の子がもう一人の子の頭を水に突っこむ。
・こちらでは一人の男の子が犬につまずいてひっくり返える。
・子供達が方々から集まって来て、学校へ連れ立って行く。
・ジペットの家の扉が開いてピノキオがとび出して来る。
・ジペットはチョッキを着せようとするが、ピノキオ跳ね回るのでつかまらない。
・子供達が角を曲って学校へ行く。
ピノキオ「あれは誰？」
ジペット「ああ、あれかね。友達さ」
ピノキオ「本当の子供なの？」
ジペット「そうだ。しかし、悪い子は木で出来ているのと変りはないのさ」
・ジペット、すきをみてチョッキを着せる。
・フィガロ、本を引っ張って来てジペットのズボンを引っ張る。
ジペット「ああそうだ。これが本だよ。それからこれを先生に。（リンゴを差し出す）そしてグルッと回ってくれ」
・ピノキオ、首だけ残して回る。
ジペット「うんうん、それじゃ学校へ行かなくちゃ」
ピノキオ「行って来まーす」
・フィガロもついて行きかけるので、ジペット尻尾をつかんで引き戻す。
ジペット「これこれフィガロ、お前はいかん」
・フィガロ、ふくれっ面。
ジペット「食べさせる口が一つ増えた訳だな。（笑って）し

かし誰かのために働らくと言う事は嬉しいもんだ」
・歌いながら家の中へ入って行く。向うから狐のジョンと、猫のギディが歩いて来る。
・子供達が学校へ行く。
ジョン「やあ、子供達が学校へ行くな。知識の泉を汲みとろうとしているのだよ。（ポスターの前で葉巻に火をつける。ポスターを見て）おやおや、ストロンボリが帰って来たぞ。ギディ、お前を人形に仕立てて売りこんだことがあったな」
・ギディ、うなずく。（彼は口のきけない身体障害者なのだ）
ジョン「ハ、ハ、ハ、あの時はもう少しでうまくだませるところだったのにね！」（歩き出す）
・向うからピノキオがやって来る。
ジョン「ああ木の少年だ。（しばらく考えて）な、なに？木の少年だと！」（驚いて後を追う　ギディ遅れて続く
・ピノキオが跳ねて行く。狐と猫が向うの壁から頭を出してついて来る。
・壁の切れ目を狐のジョンが急いで通る。
とところが猫のギディが花を持って出て来る。ジョンがステッキでギディを引っかけて引き戻す。花だけが残る。
・ジョン、ギディをステッキに引っかけたまま、向うからピノキオを追い抜いて角まで来る。
・後を向いてシーと言うが、ギディは大きな木槌を構えている。ジョン驚いてその木槌を奪い、ギディにゴッンと一発くらわす。
・ステッキを出して話し出す。

ジョン「昨日も公爵夫人が言った様に…」
・ピノキオ、ステッキに引っかかって転ぶ。
ジョン「（助け起こしながら）おお、これはこれは大変な失礼を致しました」（ピノキオの服についたホコリを払う）
・ギディ、ふところから小さなホウキを取り出して、払いついでにピノキオのポケットに手を突っこむが、ジョンにガッンとやられる。
ジョン「学校に行くんですね」
ピノキオ「そうです僕…」
ジョン「（狐のジョンは本を拾ってギディに示す）ギディ、どうだ、わかるだろう」（ギディ首を振ってうなずく。本はさかさまである）
・話しながら、ジョンはピノキオのリンゴを食べてしまい、本だけ差し出す。
ジョン「さあ、あなたの本です」
・ピノキオ、去りかける。
・ジョン、ステッキをかけて引き戻す。
ジョン「あなたは楽に出世出来る方法を知らないんですね」
ピノキオ「知らない」
・ジョン、ピノキオと肩を組む。
ジョン「私は劇場の事を言ってるんですよ！それは劇場なんだ！歌い踊り演ずる！そして拍手！ライトが当る！アンコール！名声！」
ピノキオ「名声ですって！」
ジョン「そうですとも！で、あなたの名は？」
ピノキオ「ピノキオ」

ジョン「ピノキオ！　P：I：NO：O：UU：N：：（スペルがわからないのでごまかす）時間が無駄だ！　劇場へ行こう！」（歌う）

♪ハイ　ディドル　ディディ
僕は俳優　おひげを生やし
伊達な姿は　人気の証拠
ハイ　ディドル　ディディ♪

・歌いながら行進する三人。柱の周りをぐるりと回って、また進んで行くが、ギディだけ真直に行ってしまい、あわてて引き返す。

・ピノキオも一緒に歌い出す。

・ジミニー走って来る。

ジミニー「寝坊した。良心のくせに初日から遅刻だ。（走りながら服を着ている）しかし学校は近いから間違いは起るまい」

・角を曲ろうとする時〃ハイ・ディドル・ディ〃が聞こえて来る。

ジミニー「やあ、行進だ」

・ジミニー、調子をとる。そのそばをピノキオと狐のジョン、猫のギディ通り過ぎる。

ジミニー「おや、ピノキオ！」

・ジミニー、向うへ行きかけて気がつく。

・三人の後姿。

三人「♪ハイ　ディドル　ディ　ディ　ラピアッタ　ピアッタ　タア　僕は俳優　おひげを生やし：♪」

ジミニー「ピノキオ！　ピノキオ！」

・ジミニー、呼びながら追いかけて行く。
・ジミニー、口笛を吹く。
・ジミニー、飛び上ってジョンの帽子にとまる。
ジョン「おや、おや、おや、どこだろ」
・ギディ、ジミニーを見つける。ジミニー、シーッ！と言う。ギディも真似する。そしてふところから例の大きな木槌を取り出す。そしてジョンの帽子目がけて力一ぱいなぐりつける。その瞬間、ジミニー飛び下りる。帽子がジョンの首にめり込む。ジョン、苦しそうな声を出す。
ギディ、困ってピノキオに木槌を渡し逃げてしまう。
ジミニー「おーいピノキオ！（花の中で呼んでいる）こっちだよ」
・ピノキオ、こちらにやって来る。
ピノキオ「やあ、ジミニー」
ジミニー「ね、学校はどうしたの？」
ピノキオ「正直ジョンさんがね、僕は劇場に向いているんだって！」
ジミニー「なんだって！　正直ジョンだと！誰の事だ！　よくお聞き。ユーワク覚えているかい？　あれがユーワクだ。いいかい、こう言って断わるんだ。〃僕は学校へ行くので劇場へは行きません〃ってね」
・こちらではギディが大奮闘。ジョンの帽子の上を開けてみると、すごい声でどなられる。ギディ驚いてステッキを首と帽子の間にさし込んでグイグイ押して行って木槌でゴンと一発やる。ジョンすっとぶ。木にぶっかかって小川の中へ落っこちる。

ジミニー「さあ、やってごらんよ」
・ジミニー、花の中にかくれる。
・ジョンとギディが〃ピノーキオー〃と呼びながらやって来る。
ジョン「あ、ここにいたんですか。さあ、行きましょう」
・ジミニー、耳をかたむける。
ピノキオ「さよならジミニー！」
ジミニー「な、なに！　さよならだと！」
・三人、歌いながら行ってしまう。
ジミニー「どうしよう？　親に知らせようか。いや、自分の責任だから自分でやろう」
・ジミニー、三人を追いかけて行く。（F・O）
・（F・I）人形劇団の座長ストロンボリが人々を前にして一席ぶっている。
ストロンボリ「レディス・アンド・ジェントルメン！　さて、今夜は当地最後の公演と致しまして世にも不思議なものをお目にかけます。こいつは、肝心どころの許しを受け…そいつは私だが…さるところから特別提供されたもので…そいつも私だが…世界にただ一つの歌って踊る糸なしの動く生きた人形！　ピノキオ大王です！」
・派手な前奏曲。拍手が起こる。
・ピノキオが舞台に現われる。
・歌い始める。階段を降りて来る。
ピノキオ「♪糸はもう　いらない…」
・途中で足を踏み外し階段を転げ落ちる。
・床板の穴に鼻を突っ込む。ストロンボリが奇声を発して

怒る。観客大哄笑。ストロンボリ、それに気がついて、笑ってごまかし、ピノキオを起こしてやる。再び音楽が始まる。ピノキオ再び歌い出す。

ピノキオ♪糸はもう　いらない
　やっかいものは
　どこかにすてて　僕は自由
　あやつり人形　これから自由
　ばんざい　素敵　世界を回ろう
　糸はもう　いらない
　やっかいものは
　どこかにすてて　僕は自由♪

・人々の驚きの叫び。
・ストロンボリが哄笑する。
・ピノキオが一節歌い終わるやいなや、ものすごい拍手と叫び。
・次にピノキオの背後に幕がドスンと落ちて来る。音楽の調子が変る。オランダ娘が一人登場し、ピノキオ相手に同じ歌で踊る。するともう一方から同じ人形が出て来てピノキオはさまれる。
・また幕が変る。カンカン踊りのダンサーみたいなのが出て来てピノキオにからみながら歌う。音楽の調子が変りテンポ急になる。同じ様な人形が四人出て来ていとも派手なダンスをする。
・幕が変る。音楽のテンポがゆるくなる。
。ロシア娘が現われて歌い踊る。
・幕が変る。音楽がすごい急調になり、ロシアのコサック人形が四人現われ、景気の良いダンスをする。ピノキオも真似る。ところが体がとまらなくなり、その中にまきこまれてしまう。音楽が終る。ピノキオをひっかけたままコサック人形は上につりあげられ、ピノキオがぬけて落ち、床の板に鼻を突っこむ。グイと抜くとちょうど登場したコサックの様に見える。
・人々の叫び声。沢山のお金がピノキオに向って投げられる。

ジミニー「おやおや、大変な成功だ。ああ、彼にはもう良心なんか必要じゃないだろうな。静かに身を引こう。さよなら」

・ジミニー、広場の騒ぎを後にする。(F・O)
・(F・I)ジペットの家の中。ジペットが心ずくしの御馳走を食卓の上にのせて待っている。

ジペット「ピノキオはどうしたのだろう。いたずらして先生に残されたのかな」

・フィガロが、エプロンをかけてもらって、御馳走の前で鼻をクンクンいわせている。
・クレオもやはり御馳走を金魚鉢の中に入れてもらっている。

ジペット「あまりにも遅いな。探してこなくちゃならないな」

・ジペット、マントをつけて出て行く。

ジペット「フィガロ！帰って来るまで食べるんじゃないよ。わかったかい？」

・フィガロ、うなずく。ジペット出て行く。
・ジペットが出ていくと、途端にフィガロが御馳走にかぶ

りっこうとする。と、横からブクブク音がする。クレオが食べちゃだめとかぶりをふっている。フィガロくさってしまう。
ストロンボリ「(歌う)〃糸はもういらないやっかいものはどこかにすてて僕は自由(笑う)ブラボーだ!ピノキオ!」
ピノキオ「僕は成功した?」
ストロンボリ「フム、一〇〇!」
・客が投げた金をナイフでかき寄せ数えている。
ピノキオ「僕は名優かしら?」
ストロンボリ「フム、二〇〇、三〇〇ドル!お前は凄い!全くセンセイショナルだ!」
・ピノキオの顔にツバをとばす。
ストロンボリ「そうだ。おれはお前をもっと宣伝してやるぞ!フム、おや、これはなんだ!」(鉄で出来たニセ金をつまみ上げ、丈夫な歯でかんでみて、たちまち口汚なくののしり始める。が、ピノキオに気がつくと、顔をやわらげニセ金をその手に握らせる)
ストロンボリ「君にあげるよ!私のピノキオ!」
ピノキオ「僕にくれるの?ありがとう!帰ってお父さんに話そう!」
・ストロンボリ、驚いてのみかけのウオッカをふき出してしまう。
ストロンボリ「何?何だって!家に帰る?家に帰ってお父さんに話すって:ハハハハ!」
ピノキオ「え、おかしい?うん、明日になったら帰るよ」

・机の上から飛び降りようとするピノキオをストロンボリが引きとめる。大声で笑い始める。ピノキオもつりこまれて笑い出す。ストロンボリ、ピノキオを抱き上げて鳥籠の所へ行き、ぶちこんですばやく鍵をかけてしまう。
ピノキオ「いやだ、いやだ。ここから出しておくれよ！」
ストロンボリ「お前の家はここだ。近くで便利だからな」
ストロンボリ「だまれ！　おれはお前を金を払って買ったんだぞ！」
ピノキオ「いやだ、いやだ！」
ストロンボリ「何がいやだ！　お前はこれから、おれのために沢山金を稼いでくれるんだ！　おれはお前を世界中連れて回ってやろう！　コンスタンチノーブル！　パリ！　ロンドン！　今夜出発だ！」
ピノキオ「いやだ、コンスタンチノーブルなんて行きたくないよ！」
ストロンボリ「だまれ！　散々働いてもらって、そして、いよいよ使えなくなったら：お前はよいタキモノになるんだっ！」
・と、いいざま、手にした斧を部屋の隅にハッシと投げつける。
・無表情に投げこまれた人形の屑がゆれる。
・一体の人形の胸に斧が不気味に突っ立っている。
・ピノキオ、たまらなくなってカゴをゆすって叫ぶ。
ストロンボリ「だまれ！（その大声で馬車がゆれる）ではおやすみなさい。私の木の宝さん！」
・不気味に笑ったストロンボリが投げキッスをして外に出て、ドアをバタンとしめる。途端にランプの火も消える。
ピノキオ「いやだ！　待って！　お父さんとこへ帰るんだ。ジミニー！　ジミニー！　どこだい！」
・ピノキオ、カゴをゆすって叫ぶ。と、馬車が動き出す。さらに叫び声をかき消す様な、もの凄い雷鳴。ピノキオちぢみあがる。（F・O）
・（F・I）雨の中を馬車が行く。それをジミニー・クリケットが見つめている。
ジミニー「いよいよ行くのか。これからはぜいたく三昧をして暮すんだな。しかし、もう一度会いたいな。僕は昔、友達だったんだもの。きっと会ってくれるだろう。そうだ。断わられてもいい。行ってみよう」
・ジミニー、ピョンピョンはねて行って馬車の上に飛びのり、ドアの下のすき間から入り込む。
ジミニー「ピノキオ、ピノキオ！　え、今日は！　僕ジミニーだよ。覚えてくれてる？」
ピノキオ「ジミニー！」
・ジミニー、カゴの中のピノキオを見て驚く。
ジミニー「これは一体：：」
ピノキオ「ジミニー、ジミニー、助けてよ。（泣いている）あの人は僕を働くだけ働かせて、その果ては焚木にしちまうって言うんだ」
・ジミニー、カゴにとびのる。
ジミニー「ふーむ、心配するな。五年間も鍵屋に住んでいたのは無駄じゃなかったぞ」
・服を脱いでピノキオに渡す。

・ピノキオ、不安顔で見つめる。ジミニー鍵穴の中に潜り込む。
ジミニー「うーん、相当錆びついてるな。油が要るなぁ」
・ジミニー、もう一度外に顔を出して帽子を渡す。
・ピノキオ、受け取る。
・ジミニー、鍵の中でバネを一生懸命こじている。
・ピノキオ、鍵穴から心配そうにのぞき込む。
・途端に、中からジミニー、スプリングにひっかかって飛び出して来る。
・ジミニー、鍵あけに失敗し、ピノキオの差し出す服をだまって着る。
ピノキオ「駄目かい」
ジミニー「うん…」
・二人、力なく座り込んでしまう。ピノキオ、しくしく泣き出す。涙が落ちてジミニーにかかる。
・ジペットがランタンを持って暗い通りをやって来る。道を横切ろうとすると、一台の馬車がやって来る。ジペット一歩よける。馬車の御者が邪魔だと言う様にブツブツ言う。実は人形一座のストロンボリなのだ。馬車は通り過ぎる。ジペットは大声で「ピノキオ！」と叫ぶが、運悪く、ちょうど雷鳴にかき消されてしまい、馬車の中のピノキオには聞こえなかったのだ。(F・O)
ジミニー「おやおや、泣いているのかい。（ハンカチを出してやる。さあさあ元気をお出し。これでツンとおやり。（ピノキオ鼻をかむ。ジミニーもかむ）私の様に陽気になるんだ」（ところが彼も泣顔である）

・突然、窓の外にまばゆい星の光が輝いて近づく。
ジミニー「あっ？　あ、星の女神様だぞ！」
ピノキオ「女神様だ。どうしよう」
・ジミニー、鳥の餌箱に飛び込む。
ジミニー「いいかい、正直に訳を話して謝るんだよ」
ピノキオ「だけど…」
・星が近づいて女神様の姿になる。
女神「まあ、ピノキオ、どうしたの？　学校はどうして？」
ピノキオ「やあ、こ、こんにちは」
・ピノキオ、足の間からのぞいて帽子をとっておじぎをする。
女神「まあ、ジミニーさんも！」
・ジミニー、餌箱の中から現われ、帽子を取って照れ臭そうに挨拶する。帽子の中から鳥の餌がバラバラこぼれる。
女神「ピノキオ、どうして学校へ行かなかったの？」
ピノキオ「学校？　ええと…」
ピノキオ「ええと、二人の誰かに会ったんですよ」
ピノキオ「それは一緑色の眼をした怪物が二匹やって来て僕をつかまえて袋の中へ入れてしまったんです」
・途端にピノキオの鼻が伸びる。
女神「まあ、怪物が!?」
ピノキオ「そうです。緑色の眼をした怪物です」
・また、ピノキオの鼻が伸びる。
・ピノキオ、それに気付き、妙な表情をする。
ピノキオ「お、おや一体？」
女神「その時、ジミニーさんはどこにいたの？」

ピノキオ「ジミニーは——そう、ジミニーも小さな袋に入れられたんです」

・そう話す間にも鼻は伸び続ける。鼻の先端に新芽が出て鳥が巣を作り、卵からかえった小鳥も飛んで行ってしまう。

ピノキオ「ど、どうしたんだろ。僕の鼻、鼻……」（いまにも泣き出しそうになる）

・ジミニー、しきりに気をもんでいる。

女神「あなたは、さっきからちっとも本当の事を言ってないでしょう？」

ピノキオ「全部、本当ですよ」（鼻が伸びる）

女神「ウソはどんどん大きくなっていくものなんですよ」

ピノキオ「いえ、本当です」（ピノキオの鼻の先に生えた木の葉が枯れて散る）

ピノキオ「どうか助けて下さい。ウソはつきません」

・ピノキオ、ついにウソであることを認める。

ピノキオ「二度とウソはつきません」

ジミニー「どうでしょう？　今度だけは許してやって頂けますか？」

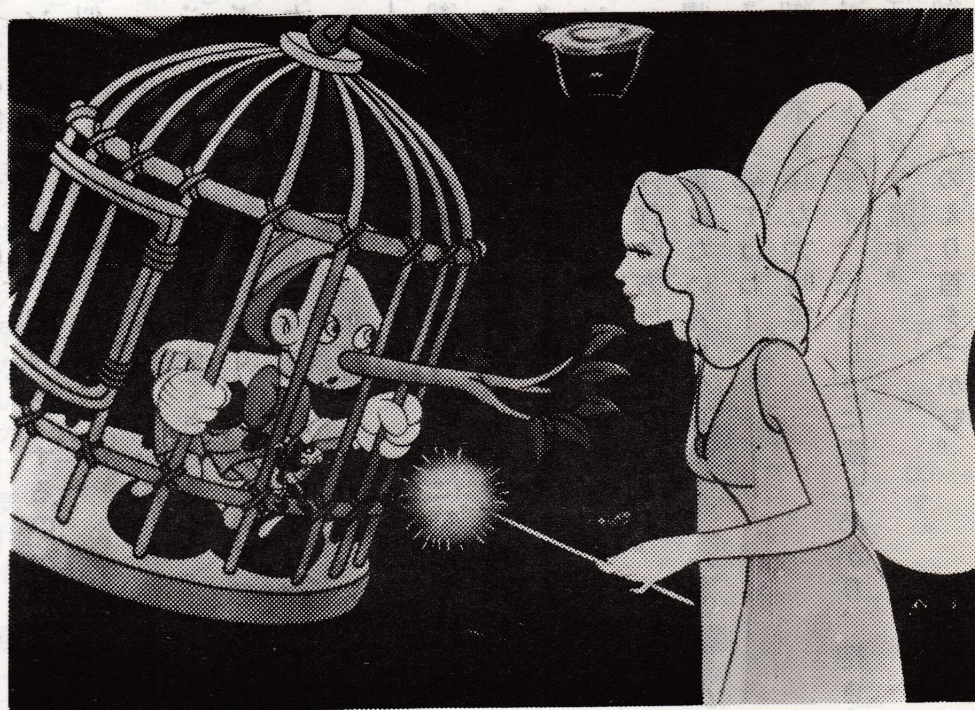
女神「そうねえ、今度だけですよ」

・女神が銀の　でピノキオの鼻をさわると、たちまち長い鼻は消え去る。

・ピノキオ、ジミニー、顔を見合わせて喜ぶ。

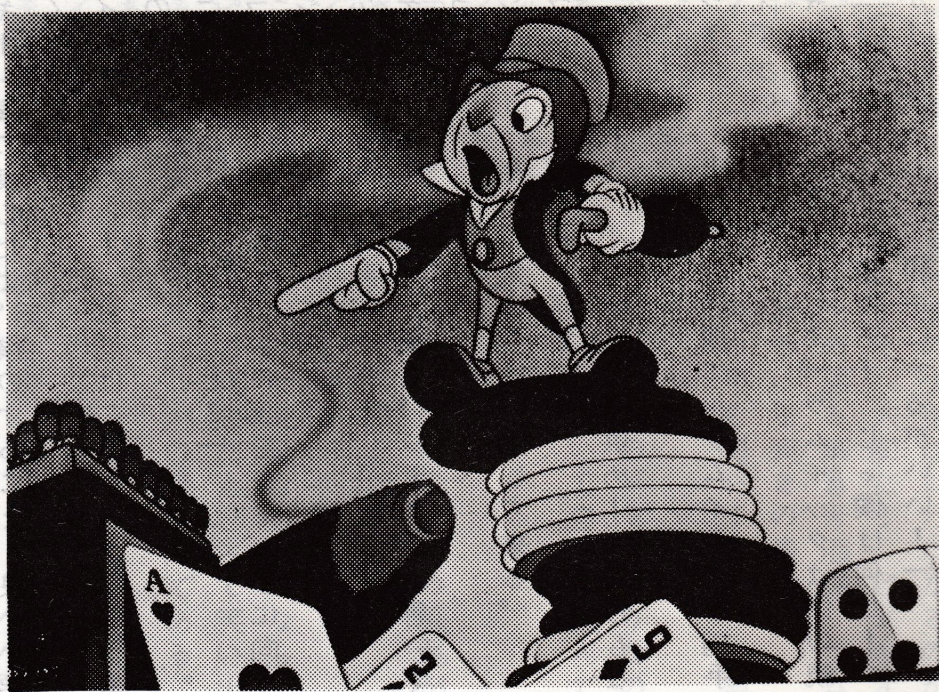
・ふと見ると、女神様がいない。

・銀の星（女神）が空に向って帰って行く。

ピノキオ「ありがとう、女神様」

ジミニー「さようなら、女神様」
・ジミニー、カゴのふたを押すと、簡単に開く。ピノキオとジミニー逃げ出す。
・二人、馬車の中から飛び出して来る。
・ジミニー、立ち止まる。
ジミニー「へん、さよならストロンボリ！」
ピノキオ「さよなら、ストロ……」
・ピノキオの声が高いので、ジミニーあわててピノキオを制する。
ジミニー「さあ、行こう！」
・二人、駆け出して行く。
・ボーッと言う船の汽笛がはるかに響く。（F・O）
・（F・I）薄暗い道路の向うに〝赤えび亭〟と言う名の評判の悪い酒場が見える。
・カメラ、酒場に近づく。中から〝ハイ・ディドル・ディ・ディ〟が聞えてくる。
・狐のジョンが一杯機嫌で歌っている。周りにギディと御者が坐っている。
ジョン「〝ハイ・ディドル・ディ・ディ　劇場へ行こう〟ハッハッハッ…。で、人形使いは、いい金をくれた。正直ジョンはいい腕さ」（金貨を机の上に置く）
・ギディ、煙草の煙をドーナツ形にして、それをつかみ、ビールのジョッキの中につけて、口に入れる。そうしてシャックリをして目を白黒させる。
・御者、陰険な目付きをして、パイプをくゆらす。
ジョン「そうだろ、ギディ？」
・ギディ、ビールの泡をふっとばす。
御者「あんた方、もっとお金を儲ける気はないかね？」
・金貨の袋をひろげる。
ジョン「ははあ…誰かを闇討ちにするのかね？」（首を切る真似をしてみせる）
御者「いいや、いや、そんなんじゃない」
・ジョンの耳元に口を寄せてささやく。
・ギディ、聞こえないので、ジョンの耳をほじくって、それに自分の耳をくっつけて勝手にうなづいている。
御者「怠け者の子供を連れて来てくれればいいんだ。そして――極楽島へ送るんだ！」
・御者の顔、次第に不気味な形相に変っていく。
ジョン「ああ、ああ、極楽島か…。えっ極楽ジマッ!!」
・あっと驚ろきギディと抱き合う。
ジョン「し、しかし法律が…！」
御者「いやいや法律の方は心配ないよ…。その少年達は二度と帰って来る事はないんだからね…。（急に物凄い形相になる）少年の姿ではね！」
・御者、不気味な大哄笑。
・ジョンとギディ、恐ろしさに震えあがり、抱き合って冷汗をタラタラ流す。
・御者、二人のえり首をつかむ。
御者「いいかっ！　真夜中に四ッ辻で馬車が待っているぞ！いい金を渡すからな」
・再び恐ろしい形相になって…
御者「いいかっ！　裏切るなよ！」（F・O）

・ピノキオとジミニーがやって来る。
ピノキオ「帰ったら勉強する。俳優なんかにならない！」
ジミニー「そいつはいい事だ。じゃ、家まで駆けっくらして
　行こう」
・二人、走り出す。
・ピノキオ、急に後ろから首筋へステッキをひっかけられ
　る。
ジョン「これはこれは、ピノキオさん」
ピノキオ「駆けっくらしてるの。ああ、こんにちは」
ジョン「ストロンボリのところはどうでした？」
ピノキオ「とってもひどい目にあったよ！　鳥カゴに押し込
　めて、おしまいにはつぶすんだ！」
ジョン「おお何と何と。そんな具合では、きっとあなたは神
　経衰弱になったでしょう？　なったとも！」
・ジョン、眼鏡を取り出して。
ジョン「ギディ、書けよ」
・ギディ、鉛筆とノートを取り出す。
ジョン「舌を出して。言ってごらん〃とっきょきょかきょく
　〃」
・ピノキオ、その通り言う。
ジョン「では、目をつぶって」
・赤い斑点模様のハンカチを取り出して、ピノキオの目の
　前に出す。
ジョン「さあ、何が見える？」
ピノキオ「点々：：」

・ギディ、一生懸命、ジョンの言う事を書いている。
・ジョン、ピノキオのシャツをめくって、腹に耳をつけ、
　ステッキで後ろの壁を心臓のリズムがわりにドンドン、
　トントンたたく。
・その音につられて、ギディ踊り出す。
・ジョン、ギディのノートをひったくり、ゴンと一発くら
　わす。
ジョン「ああ、これではっきりした」
・ノートには目茶苦茶な線で落書がいっぱい書かれている。
ジョン「つまり君は恐ろしいアレルギー病なんだ！　これを
　直す方法は一っしかない」
・ギディ、一人で喜んでいる。
ジョン「極楽島へ行くんだ！」
ピノキオ「極楽島？　でも：：」
ジョン「そう！　毎日が休日なんだよ」
ピノキオ「しかし、僕、行けません：：」
ジョン「切符ならあげるよ」
・ジョン、ふところからスペードの〃１〃のトランプを出
　し、与える。
ピノキオ「ありがとう！　でも：：」
ジョン「極楽島へ行こう！　ハイ・ディドル・ディ・ディ！
　毎日お休み！　ハイ・ディドル・ディ・ディ！」
・ジミニー、ピノキオの居ないのに気付き、戻ってきてみ
　ると、ピノキオと二人の悪人が歌いながら向うに行く。ジ
　ミニー、驚いて追いかける。
ジミニー「ピノック、ピノック！」

・馬車の下にやっとつかまったジミニーが砂ぼこりに閉口
している。
ジミニー「また面倒な事になった！」
・馬車に沢山のいたずら小僧達が乗っている。ピノキオと
リーダー格のラムイックが御者の隣りに座っている。ラム
イックはあたりかまわずパチンコを撃ちまくっている。
ラムイック「おれラムイック。お前は」
ピノキオ「ピノキオさ」
ラムイック「極楽島は初めてかい？」
ピノキオ「初めてだよ。切符をくれたんでね」
ラムイック「おれもさ。いいところだってな。何でもロハで
さ。早く行きたいな」
・子供達は馬車から船に乗り移る。
・船は、はるか彼方の島目指し進んで行く。船が島に着く。
子供達はワッと喚声をあげて上陸する。
・その有様を、御者が不気味な目付きで眺めている。
・沢山の遊び場所がある。子供達が群がっている。
呼び声「さあ、いらっしゃい！　いらっしゃい。何でもたら
ふく詰め込みなさい！　なんでもタダだよ。お早く、お早
く！」
・不気味な人間の形をした門が呼び込みをしている。子供
達、先を争って馳けてゆく。
呼び声「さあさあ、乱暴館はこちらこちら！　けんかをして
も、壊しても怒らないよ！」
ラムイック「乱暴館だとさ、行こう！　誰かをなぐってやろ
う！」
ピノキオ「どうするの？」
ラムイック「人をなぐるの面白いよ」
ピノキオ「ようし、行こう！」
・インディアンの形をした人形が葉巻や、シガレットをま
き散らしている。
呼び声「さあお早く、お早く！　煙草館だよ。煙草館！」
呼び声「早く早く！　モデルホームだよ！　壊し放題！　壊
し放題！」
・子供達、寄ってたかって壊す。
ラムイック「どうだね」
・ラムイックがモナリザの絵でマッチをすって煙草に火を
つける。
ピノキオ「うん、悪い事は面白いね！」
ラムイック「あのステンドグラスを見な！」
・煉瓦を拾ってぶっつける。ステンドグラスくだけ散る。
御者「さあさあ門をしめろ！　早く早く」
・黒覆面の気味の悪い男達が大勢で門をしめる。
御者「フフフ、悪い子供や学校をさぼる子供は放っておくと
ロバになってしまうのだ。フフフ…」
・急に辺りが静かになり、不気味に静まりかえる。ジミニ
ーの声が聞こえて来る。
ジミニー「ピノキオ！（口笛を吹く）ピノキオ！　どこだい
？」
・向うに玉突の玉の形をしたホールがある。第8号酒場で
ある。
・ジミニー、そちらをちらと見て画面を横切る。（C・U）

・ラムイックが〃ハイ・ディドル・ディ・ディ〃を口笛で吹きながら玉突きをしている。
ピノキオ「みんなどこへ行ってしまったんだろうな？　ラムイック」
ラムイック「平気さ。（玉を突く）どうだい？　煙草は？」
ピノキオ「うん　いいや」（葉巻をスパスパ吸う）
ラムイック「おやおや　そんな吸い方ってあるかい！　おばあさんみたいだ」
・自分で吸ってみせる。
ピノキオ「オーケイ！　やれるさ」
・自信たっぷり吸い込む。顔面次第に赤くなり、ついで緑色に変る。眼には薄い膜がはる。ピノキオ首を振る。涙が出る。
・ラムイック、玉突きの点を追加する。
ラムイック「どうだい！」
・ピノキオ、力なくうなずく。
ラムイック「お前の番だぜ」
・ピノキオ、煙草に酔ってフラフラである。
・スティックで玉を突こうとするが、玉がゆれて見える。首を振る。ギディ、ギディと音がする。
・ジミニーが部屋へ入って来て驚く。
ジミニー「ピノキオッ！」
・ピノキオ驚いて前につんのめり、葉巻つぶれてしまう。
ジミニー「なんだ！　煙草の真似なんか！　さあ、家へ帰るんだ！」
・ジミニー、玉を蹴っとばして悲鳴をあげる。

ラムイック「おいおい　このバッタは何だ?」
・ジミニーをつまみあげる。ジミニー　はなせはなせと怒る。
ピノキオ「僕の良心だよ。僕のすること　良いか悪いか教えてくれるんだ」
ラムイック「何だと！　お前はこのバッタの言う事を聞くってのかい?」
ジミニー「なに！　バッタだと！」
・ラムイック　ビリヤードの玉をジミニーに向けて突く。
ジミニー　玉に当って穴に落っこちる。
・穴の中。ジミニー転って来る。止まる。
・その後から玉が転って来る。ジミニー　急いで帽子を拾う。
・ジミニー　やっと穴からはい出して来る。
・ラムイックがそれを見て笑う。
ジミニー「黙れ！　小生意気な子供め！　良心もないくせに！　こらしめてやる！」
・ジミニー　上衣を脱ぎ捨て　ラムイックを相手にと身構えて歩いて行く。
ピノキオ「ジミニーおよしよ。ラムイックは僕の親友なんだ」
ジミニー「何っ！　親友だと！　じゃ僕は何だ！　単なる良心か！　よろしい　勝手にするがいい！」
・ジミニー　上衣を後まえに着て歩いて行き　玉突きの穴に落っこちる。それを見たラムイック笑う。
ピノキオ「だつてジミニー！」
ジミニー「何がハッハッハだ！　勝手にロバにでもなるがいい！　もうおしまいだ！」
・ジミニー、怒って出て行く。プンプン怒りながら歩いて行く。
ピノキオ「でも、ラムイックはね……」
ラムイック「さあ、いいからいいから、放っときな」
ジミニー「あれだけ尽くしてやったのに！」
・破れた本や、投げ捨てられたテープを蹴散らかして歩く。
ジミニー「次の船で帰ろう。おい！　門を開けてくれ、開けてくれ。帰るんだ！」
・ロバの鳴き声がする。ジミニー驚いて扉のすき間からのぞく。
・沢山のロバがいる。
ジミニー「何て沢山のロバだ」
御者「よろしいっ！　次！」
・服を着たままの一匹のロバが御者の前に出される。
御者「お前の名前は?」
・ロバ、アー、ウーと鳴くだけである。
御者「よしっ！　次！」
・ロバは服を脱がされて木の箱へ入れられる。
御者「よしっ！　次。お前の名前は?」
ロバ「ア、ア、アレキサンダー」
御者「ふん！　まだ口がきけるな?」
ロバ「は、はい。どうぞお母さんのところへ帰らせて下さい」
御者「黙れ！　まだロバになり切ってないぞ！」
・ロバは囲いの中へ投げ込まれる。
ロバ達「どうぞ、どうぞお母さんの所へ帰らせて下さい」

（鳴きわめく）
御者「黙れ！」
・ロバ達、鞭の音にすくみ上る。
御者「お前達の様な怠け者の少年はロバになるのが当然だ！」
ジミニー「少、少年だって！　大変だ！　ピノキオッ！」
・ピノキオとラムイックの居る第8号酒場。ラムイック
ビールのジョッキを片手に玉突きの最中。
ラムイック「へッ、あの虫の声を聞いてると、本当になんか
起こりそうだよ」
・途端にラムイックの耳にロバの耳そっくりなのが生える。
・それを目撃したピノキオ、驚いて自分の飲んでいたビー
ルを押しやる。
ラムイック「良心！　へんっ！だ」
・向うをむいて玉を突くと、途端にロバの尻尾が生える。
・さらに驚いたピノキオ、煙草を捨てる。
ラムイック「人をロバ扱いしやがって！」
・こちらを振り向くと、顔が完全なロバになっている。
・ピノキオ、ラムイックの冗談だと思って笑い出す。とこ
ろが、その笑い声が既にロバの鳴き声である。ピノキオ
あわてて口を押える。
ラムイック「何だ！　ロバの真似はよせ。ハッハッハ……」
・その声も既にロバの鳴き声になっている。
ラムイック「どうしたんだ。今のはおれの声かい？　一体…」
・ラムイック、鼻を触る。耳を触り、はじめて自分がロバ
になったのに気づく。そして物凄い声で絶叫する。
ラムイック「だまされたぞ！」

・鏡の前にとんで行き、姿を写す。
ラムイック「助けてくれー！　誰か助けてくれー！」
・ピノキオの前にひざまづく
ラムイック「頼む、頼む。あの虫に頼んでくれ。誰でもいい
ラムイック「ママー、ママー！」
・ところが時既に遅く、その手はロバのヒジメに変っている。やがて完全なロバに変身したラムイックは泣きさけびながら大暴れを始め、椅子を蹴飛ばす。テーブルのトランプが舞い散る。ピノキオの頭上をかすめる。
・突然、ピノキオにもロバの耳が生える。
・あっと驚くピノキオ。驚いている間に今度はロバの尻尾が生え出す。
ピノキオ「一体どうしたんだろ！」
・そこへジミニーが飛び込んで来る。
ジミニー「早く逃げるんだ！　皆なロバになってしまった！
あっ、君もか！　なり切らない内に逃げるんだ！」
・二人、逃げ出す。岩壁をよじのぼる。
ジミニー「この道しかない！」（険しい道を這い上って行く）
早く！　飛び込めっ！」
・二人、水中に飛び込む。（F・O）
・（F・I）ピノキオが這い上って来る。
ピノキオ「ジミニー、ジミニー大丈夫？　ジミニー」
・ピノキオ、自分の尻尾を引っ張り上げると、ジミニーがしがみついている。
・ジミニー、耳を叩いて水を出す。
ジミニー「うん、さあ、行こう」

・ジペットの家のある懐しの街。ピノキオとジミニーが走って来る。
ピノキオ「お父さん！　お父さん！　帰って来ましたよ。お父さん！」
・ジミニー、ドアを傘でノックする。
ジミニー「帰って来ましたよ。ジペットさん。開けて下さい」
ジミニー「寝てるのかな？」
ピノキオ「お父さん、お父さん、僕だよ」
・ジミニー、返事がないので、窓にはねて行って、ガラスを拭き、中をのぞき見る。
ジミニー「おいピノキク！　来てごらん」
・部屋の中、ガランとして既にクモの巣まで張っている。
ジミニー「誰も居ない。ジペットさんも、フィガロも：：」
ピノキオ「どうしたんだろう？　どこへ行っちゃったんだ。
クレオも：：」
ジミニー「心配しなくていい」
・その時、空から光り輝く鳩が舞い降りて来て手紙を落していく。
ジミニー「おや、手紙だ！」
・眼鏡を取り出し、字の上をはねながら読んでいく。
ピノキオ「何て書いてあるの？」
ジミニー「君のお父さんからだ」
ジミニー「えーと〃私はお前を捜しに行って鯨の腹の中に呑まれてしまった：〃」
ピノキオ「鯨に呑まれたって！」
ジミニー「うん、その通り。えっ！　クジラ！　鯨のモンス

トロに呑まれて！」
ピノキオ「ど、どこで？」
ジミニー「海の中でだって」
・ピノキオ、さっと立ち上り、歩いて行く。ジミニー、驚いて後を追う。
ジミニー「ど、どこへ行くんだ」
ピノキオ「お父さんを捜しに行くんだ！」
・断崖絶壁の上に来る。前は深い海。
・ピノキオ、尻尾に石を結びつけ始める。
ジミニー「気でも狂ったのか？危険な事なんだぞ」
ピノキオ「さよなら、ジミニー」
・ジミニーに手をさしのべる。
ジミニー「なに！さよならだって？魚よ、食らわば食らえだ！」
・ジミニー、鼻をつまんで尻尾の石の上に乗り、ピノキオはその石を抱いて断崖の上に立つ。
ジミニー「飛び降りる所に気をつけろ！」
・二人、海中目がけて飛び降りる。
・海中、ピノキオはどんどん沈んで行く。
・魚が逃げまどう。遂に海底に着く。（以下、二人の声はエフェクト音で、水中で話すふるえた様な感じで表現される）
ピノキオ「うわぁ！何て広いんだろう」
・ジミニー、浮力で浮びかけるので傘を海底の石に引っかける。小さい魚が一匹やって来る。ジミニー、小石を拾って帽子の中に入れてかぶり、二、三歩歩くが重心がかわり、ひっくりかえって、さかさまになってしまう。小さな魚はジミニーがお気に召したらしい。
・ジミニー、今度は小石を拾ってズボンの中に入れてみようとする。
ジミニー「珍し気にジロジロ見るなよ」
・石をズボンの中に入れて歩いて行く。小魚が後からついて行く。
・ピノキオがサンゴやカキの群生する中に入って来る。
・カキやサンゴはピノキオの声に驚いて一斉に首をすぼめる。ピノキオが去ると又、首を出す。
ピノキオ「お父さーん！」
・カキやサンゴ、一斉に首をすぼめる。
・ジミニーの傘に小魚がかみつく。ジミニー怒って魚を欧ろうとすると、母親らしい大魚が現われ　ジミニーあわてる。
ジミニー「おいピノック、待ってくれよ」
ジミニー「お父さーん！　え？　僕のお父さんじゃないや。ジペットさーん！」
ジミニー「ええ、モンストロのいるところを伺いたいのですが：：」
・大魚と小魚、モンストロと聞くと驚いて逃げ去る。ジミニー、不思議そうに眺める。
・小さな口のとがった魚がピノキオの周りにやって来る。ピノキオが〃ハロー〃と言うと袖の中にとび込む。ピノキオくすぐったがる。いつの間にか、沢山の魚達がつい

て来ている。

ピノキオ「ハロー、ここらでモンストロのいるところを知りませんか？」

・途端に魚達は水をはねかえして逃げてしまう。

ピノキオ「おや、怖がってる」

・ジミニー、大きな貝をノックする。ギーッと聞く。ジミニー、貝の中へ入って行って、丁寧に帽子をとる。

ジミニー「えー、ここらでモンストロを見かけませんでしたか？」

・途端に見は口を閉じてしまい、砂の中に潜る。泡がとび出す。その一つの泡の中にジミニーが入っている。帽子の入ったアブクも浮かんで来る。ジミニー、傘の柄をアブクの外に出して帽子をひっかけると、その破れた穴から水が入って来て、やがてポンとアブクが割れる。ジミニー、ピノキオを追いかけて泳いで行く。

・気がつくとピノキオの尻尾に結んだ石にタツノオトシゴやヒトデが一ぱいくっついている。ジミニー、それを追っぱらう。

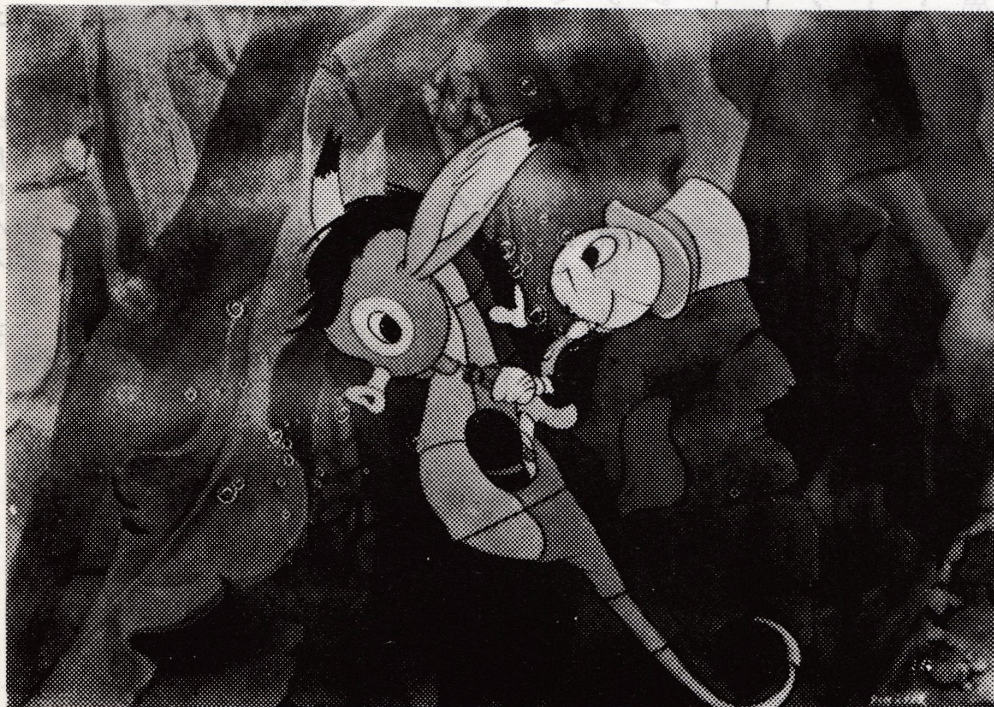
ジミニー「さあ、あっちへ行け。さあ、さあ」

・タツノオトシゴが沢山寄って来る。ジミニー、その顔がロバに似ているので驚く。中の一匹がピノキオの鼻にくっつく。ピノキオ、くっくっ笑う。

・ジミニーが一匹のタツノオトシゴにロデオばりに乗って得意満面。

ジミニー「さあ、行こう！」

ピノキオ「ねえ、ここらにモンストロのいるところ知らない

？」

・途端に、タツノオトシゴは一匹残らず逃げてしまう。

・ジミニーの乗ったタツノオトシゴも大暴れを始める。ジミニー、振り落される。

・二人はジペットの名を呼びながら海中を進んでいく。

（Ｆ・Ｏ）

・（Ｆ・Ｉ）モビイ・デイックの様な巨大なモンストロが眠っている。

・その大きな暗い鯨の腹の中に、小さな船が呑みこまれている。人影が見える。ジペットとフィガロらしい。

（Ｃ・Ｕ）

・ジペットは鯨の腹の中で食糧の魚を釣っている。フィガロも尻尾に糸をつけて釣っているが全く釣れそうにない。

ジペット「ああ、もう今日で三ケ月も経った。ここでこんなことになろうとはな。もうこの腹の中には魚は一匹も残っていないんだ。可哀そうなピノキオ。いい子だったのに。なあ、フィガロ……」

・フィガロ、尻尾をグルグル回して糸を引き上げるが、何もかかっていない。フィガロ、元気なく再び糸を垂れる

・金魚鉢にはクレオもいる。しかし、すっかり元気がなくなっている。

ジペット「鯨が眠っている間は、魚は入ってこないな。ああ、もう目をさましてくれないと、わしらの命も長くない」

・モンストロの目が、かすかに開く。マグロの群が折悪しく通りかかろうとする。

・モンストロは目を閉じて待っている。マグロが目のそばに来た時、モンストロは突然、目を開く。驚く魚の群。先を争って逃げる。モンストロの巨体がググッーと動くと見る間に魚群の後を追い始める。

。逃げる魚群、追うモンストロ。

・ピノキオがやって来る。マグロの群が沢山猛スピードで前からやって来る。ピノキオが話しかけようとするが、おそろしい勢で逃げて行く。ピノキオ、やっとモンストロに気づく。

ピノキオ「モンストロだ！」

ジミニー「モンストロだ！　逃げるんだ！」

・ところが、ピノキオの尻尾に結ばれた石が岩の割目にひっかかって動けない。あせるピノキオ。ジミニー、急いで尻尾の結び目を解いて石を捨てる。ピノキオ、やっと自由になって逃げ出す。

ジミニー「急げ！　急ぐんだ」

・ジミニー、物凄い勢で逃げる。ピノキオも逃げる。

・モンストロの巨体がさっきの岩にぶつかり、岩がふっとんでしまう。

・逃げるピノキオ、ジミニー。魚群を追うモンストロ。モンストロ、大きな口を開ける。

。ピノキオや魚群は遂に海面にとび出し、落ちるところをモンストロがパックリ呑み込む。ジミニーは取り残される。

・モンストロの巨大な口の中へ魚が一ぱい流れこんで来る。

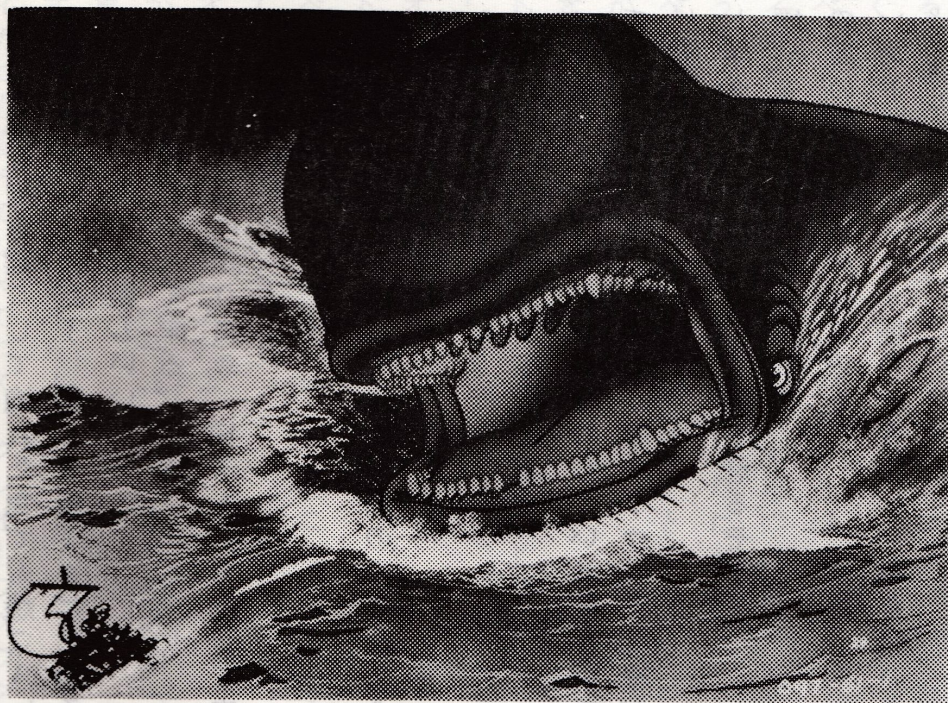
ジミニー「おい、あけろ！」

・ジペット、この魚群を見つけて叫ぶ。

ジペット「見ろ！フィガロ！ 食糧だ！ 食糧だ！」
・モンストロの口の中に入って来るおびただしい魚の群。
・ジペットは釣り竿でマグロを釣り始める。たちまち一匹がかかる。マグロは釣りばりを外し、箱の中に放り込まれる。暴れてとび出そうとすると、フィガロがガンと一発くらわす。
・ジペット、なおも沢山の魚を釣り上げる。
・フィガロも沢山釣れた魚を始末するのに大忙しである。とうとう魚の尻尾でピシャピシャたたかれる。
・ジペットがピノキオを釣り揚げる。ところが、ジペット気がつかない。
ピノキオ「お父さん！」
ジペット「こらこらピノキオ、邪魔するなよ。え？ ピノキオ？！ ピノキオ！」
ピノキオ「お父さん！」
ジペット「ピノキオ！」
・ジペット、ピノキオに抱きつく。ところがジペットが抱いているのは魚である。
ピノキオ「お父さん、僕ここだよ！」
・やがて、ピノキオとジペットはしっかり抱き合って再会を喜ぶ。
ピノキオ「フィガロ、クレオも！」
・フィガロも喜んでじゃれつく。クレオもブクブクあぶくをたてて喜ぶ。
・ピノキオ、フィガロと喜び合っているうちにハクションとくしゃみする。

ジペット「おやおや、風邪を引いたな」
・ジペット、すぐ毛布を持って来てピノキオをくるむ。
ジペット「濡れたものは乾かさなくちゃ」
・ジペット、ピノキオの帽子を取る。中から現われたのはロバの耳である。
ジペット「ピノキオ！ それは！」
ピノキオ「え？ どうしたの？」
ジペット「その耳は……」
ピノキオ「えっ！ あ、これ……ハ、ハ、ハ 耳ですよ。それに尻尾まであるよ」（ロバの声で笑う）
・虚勢を張っていたピノキオ、泣き出しそうになる。
ジペット「構わん、構わん。私はお前と一緒に居るだけでいいんだよ」
・二人はしっかり抱き合う。
・海に浮んだモンストロは既に歯を閉じて眠っている。
・モンストロの口の前にジミニー現われる。
ジミニー「ねえ、開けてくれませんか。中に友達がいるんですが……」
・ところが、空中から鴎が舞い降りて来てジミニーをつつこうとする。ジミニー、驚いて、浮いていたビンの中に入りこみ、傘でフタをする。
・モンストロの腹の中。ジペットがピノキオに話している。
ジペット「いろいろやってみたが、逃げ出すのに失敗した。もう絶望だよ。イカダまで造ったんだが」
・ボロ材木で造ったイカダがロープでつながれている。
ピノキオ「そうだ！ 鯨が口を開けた時、それに乗って逃げ

よう！」
ジペット「いやいや、鯨が口を開ける時は、入って来るだけで、何も出さないんだ…。（ピノキオ、失望する）絶望だ。それよりも火を起こして漁れた魚でも焼こう」
ピノキオ「そうだ！　火だ！　煙（スモーク）を出そう！」
ジペット「うん、魚の燻製もいいな」
・ジペット、薪を持って来る。
・ピノキオ、船室に走りこみ、椅子を持ち出して来て、樽にたたきつける。
ジペット「椅子はいかん！」
・ピノキオ、ランプを持って来て、薪の上にたたきつける。薪はたちまち燃え始める。
ジペット「一体どうするんだ？」
ピノキオ「鯨にクシャミさせるんだよ」
・ピノキオ、ジペットがウロウロしている間に、毛布を持って来て、火の上にかぶせ、フウフウ吹く。やがて黒い煙が出て来る。
ジペット「クシャミだって…鯨が怒るぞ」
・黒煙がモクモクと立ち昇る。
・鯨の鼻の穴から煙が出て来る。
・モンストロ、グフッと煙をはき出し、息を吸いこみ始める。
・口の中に水が入って来る。ジミニーも吸いこまれそうになるが、途中まで来てから、傘で漕いで逃げる。
・ジペットとピノキオが、イカダを鯨の口の外に運ぶために押して来る。

ジペット「駄目だ。歯に引っかかるぞ」
・ピノキオ、帆を縛りつける。
・モンストロ、遂に大きなクシャミをする。水と一緒にイカダが吹きとばされる。
・モンストロ、息を吸いこみ始める。イカダは逆戻りしそうになる。
・モンストロ、再び猛烈なクシャミをする。
・イカダは吹きとばされて鯨の口の外へ。
・ジミニーの入ったビンもとばされる。
ピノキオ「それ行くよ」
ジペット「それ、漕げっ！」
・ジペットとピノキオ、懸命に漕ぐ。
・モンストロ、煙をはき出しながら、物凄い声でうなる。
ジペット「それみろ。鯨が怒ったぞ！」
・ジペットとピノキオ、必死に漕ぐ。
・モンストロ、遂に怒り出し、水しぶきをあげて、イカダを追う。
・ピノキオとジペット、懸命に漕ぐ。
・モンストロ、水中に潜る。
ジペット「ちょっと待て。あいつはどこへ行ったんだ？」
・その瞬間、モンストロがイカダの下から出現し、イカダをはねとばす。ジペットとピノキオ、鯨の体の上で転がり、水中に落ちるが、やっとのことでイカダの上に這い上る。
・モンストロ、海岸まで来て、急停止し、方向を換える。
ジペット「戻って来るぞ！　俺達を殺しに来るんだ！」

・ジペットとピノキオ、反対の方向へ必死に漕ぎ出す。
・鯨が追いかけて来る。
・イカダは大きな波の頂上に押し上げられ、急速度で滑り落ちる。
・次の瞬間、モンストロがイカダと少ししか離れていない海上にとびこんで来る。
ジペット「気をつけろっ！」
・モンストロが巨大な尻尾を振りおろす。イカダはバラバラに壊れる。
・水中。イカダの破片が沈んで行く。
ピノキオ「お父さん！　お父さん！　お父さん！」
ジペット「ピノキオ！　お前だけ助かれ！　早く！　岸に向って泳げ！」
・ジペット、力尽きて沈みかける。
・モンストロが浮上し、二人を見つけて追って来る。
・ピノキオ、驚いてジペットを引っ張って必死に泳ぐ。
・モンストロ、次第に追いついて来る。
・ピノキオ、ジペットを引っ張り逃げ泳ぐ。
・海岸近くの岩のくぼみに小さな穴が見える。
・ピノキオ、それに向って泳ぐ。
・モンストロ、追って来る。
・ピノキオ、ようやく穴の近くまで泳ぎつくが、波のはね返しで穴に入れない。
・モンストロが巨大な口を開けてジャンプする。
・ようやくジペットを引っ張り穴に入りこむ。
・瞬間、モンストロが岩に激しくぶつかる。

・その衝撃でジペットは砂浜に打ち上げられる。
・岸に波が寄せて来る。フィガロが木片にすがりついて流
　されて来てジペットの横たわる砂浜にうち寄せられる。
　金魚鉢が流れつき、クレオも助かっていた。
・ジペットはまだ完全に意識が戻らず、うわごとを口走る。
ジペット「ピノキオ！　お前だけ助かれ！　私に構うんじゃ
　ない」
・フィガロ、ジペットの姿を悲し気に見つめている。
・ジミニー・クリケットもやっと流れつく。
ジミニー「ピノキオー！　おーい！　ピノキオー！」
・ジミニー、岩の上に来る。
ジミニー「ピノキ…！」
・叫びかけて、ハッと息をのむ。
・ピノキオが顔を下に向け、半分沈んだ状態で水死してい
　る。（F・O）
・（F・I）ピノキオがジペット家のベッドの上に寝かさ
　れている。
・ジペットがベッドによりかかって嘆き悲しんでいる。
ジペット「私の息子よ。私の勇敢な息子！」
・フィガロも、クレオも悲しみに泣きくれている。
・ジミニーがロウソク立てに寄りかかって泣いている。
・どこからともなく〃星に祈れば願いがかなう〃のメロデ
　が聞えて来る。そして女神様の声。
・ピノキオがベッドの上に寝かされている。
女神の声「立派に強く正しく、人の為に尽しなさい。そうし
　たら、いつか本当の少年になれる時が来るでしょう。ピノ
　キオ！　起きなさい。」
・ピノキオの体の周りに光が輝き始め、本当の人間の少年
　になる。
・ピノキオ、目をこすって起き上る。
ピノキオ「お父さん、お父さん、何を悲しんでるの？」
ジペット「お前が死んじゃったんだもの。ピノキオ」
ピノキオ「いや、僕は死んでないよ。ほら」
ジペット「寝てろ、寝てろ」
ピノキオ「死んでないよ。それに…それに…僕は生きてる…
　そして」
・自分の手足を見る。
ピノキオ「僕は本当の少年になったんだ！」
・ジミニー、顔をあげる。
・ジペット、ようやく正気に戻り、この出来事に狂喜する。
ジペット「死んでない！　それに本当の少年になった！　こ
　いつはお祝いしなくちゃ！」
・フィガロも大喜びで、クレオの金魚鉢にとび込んで、ク
　レオにキスする。
ジペット「プロフェッサー、音楽だ！」
・ジペット、オルゴールを片っ端から鳴らし回る。
・フィガロも、ピノキオも手伝う。
・ジペットとピノキオ、踊り出す。
・フィガロが鉢の中のクレオ相手に踊っている。
・ジミニーも踊り出す。ジミニー、窓の方に歩いて行き、
　貴夫人の人形をチラと見て窓の外に出て行く。
・窓の外に出ると、夜空に星が美しく輝いている。

・ジミニー、夜空に向って語りかける。
ジミニー「いい子です。本当の子供になる資格はあります。
それに…、な、なんだろ？」
・突然、ジミニーの胸に光が輝く。
・純金のメダルが光ってついている。それには〃18K良心監視人〃と刻印されている。
ジミニー「ファ、ホ、ホ、ホ！なんとなんと純金だぞ！」
・ジミニー、メダルを磨く。
ジミニー「有難うございました。女神様」
・夜空に一きわ美しく星が輝いている。コーラスが聞えて来る。
コーラス「♪星にいのれば　願いがかなう　どんな願いもかなうのよ♪」
（エンド・マーク）

昭和27年9月30日発行「スリーピー・シンフォニー」No.7
〃28年3月15日発行「　〃　」No.9
より転載

シナリオ解説

「ピノキオ」のオリジナル版（スーパーインポーズ版）の日本初公開は昭和27年5月。リバイバル公開（34年）で日本語吹換版が上映された。こと外国映画においては、いくら日本の声優達の声技（？）が上手くてもオリジナル版の良さに勝るものはない。特にディズニーの長篇アニメでは、オリジナル・ソングの素晴しさは、日本語版になるとブチこわしなのである。一時期、東京の特定封切館で、ディズニー長篇アニメのオリジナル版（字幕スーパー）を最終回のみ上映（東京は外人も多いからか？）すると言うサービスがされた。アニメ・ブームとやらで和製劇場アニメの氾濫で、老舗のディズニー作品もオクラになる時代である。しかし、TV映画でも音声多重放映の時代。外国長篇アニメのオリジナル版公開の運動が起きても…と思われるが現実は夢であろう。長篇第一作「白雪姫」のシナリオは、オリジナル版公開時にシナリオ出版社によって刊行された。おまけに今年になってセリフ入りの二枚組のサントラ盤まで発売されている。「ピノキオ」のシナリオは残念ながらキネマ旬報にも採録されていない。しかし当時、和歌山在住の熱心な二人のディズニー・ファンによって不完全ながらシナリオが採録されていた。当時、高校三年生であった二人は、封切館に何度も足を運び、映画中の画面のスーパーインポーズ（字幕）をペン・ライト片手にノートに筆記したのである。暗闇の中での困難な筆記作業を、若きアニメ・ファンがやってのけた。ディズニーのアニメに魅せられた二人の情熱の産物であろう。

お断わりしておきたいのは、このシナリオは完全なシナリオではない。映画ファンなら充分御存知であるが、字幕スーパーは映写画面の平均的な読み取り時間から割り出して翻訳される。従ってスーパーからオリジナルの会話の忠実な再現は不可能である。携帯テレコの発達した現在ならば、劇場でのテープ採録は、いとも簡単であり、ヒット作品の和製アニメなども上映中、舞台の上にテレコがズラリと並ぶ光景も見受けられる。蛇足になるが「ピノキオ」公開当時、テープレコーダなんて文明の利器は存在せず、東通工（ソニーの前身）が開発した重量何キロものオープン・リール・デッキが誕生したのも後の事だったのだ。

従ってテープ採録によるシナリオではないが、このシナリオからオリジナル版の会話のニュアンスと全体の物語構成の雰囲気を理解して頂く一助となれば、オリジナル版公開から29年ぶりにこのシナリオを複刻した採録者及び発行者共々幸甚の至りである。（S56年10月Y・W記）

WALT DISNEY'S "PINOCCHIO"

Based on the story by Collodi

Supervising Directors...	Ben Sharpsteen: Hamilton Luske:
Sequence Directors...	Bill Roberts: Norman Ferguson: Jack Kinney: Wilfred Jackson: T Hee.
Animation Directors...	Fred Moore: Franklin Thomas: Milton Kahl: Vladimir Tytla: Ward Kimball: Arthur Babbitt: Eric Larson: Woolie Reitherman.
Story Adaptation...	Ted Sears: Otto Englander: Webb Smith: William Cottrell: Joseph Sabo: Erdman Penner: Aurelius Battaglia.
Character Designs ...	Joe Gran: Albert Hurter: John P Miller: Campbell Grant: Martin Provensen: John Walbridge.
Music and Lyries ...	Leigh Harline: Ned Washington: Paul J Smith.
Art Direction ...	Charles Philippi: Hugh Hennesy: Kennth Anderson: Dick Kelsey: Kendall O'Connor: Terrell Stapp: Thor Putman: John Hubley: McLaren Stewart: Al Zinnen.
Backgrounds	Claude Coats: Merle Cox: Ed Starr: Ray Huffine.
Animation	Jack Campbell: Oliver M Johnston: BerneyWolf: Don Towsley: Don Lusk: John Lounsvery: Norman Tate: John Bradbury: Lynn Karp: Charlse Nichols: Art Palmer: Joshur Meador: Don Tobin: Robert Martsch: George Rowley: John McManus: Don Patterson: Preston Blair: Les Clark: Mervin Woodward: Hugh Fraster: John Elliotte.

Songs "When You Wish Upon a Star"(第３０回アカデミー賞主題歌賞授賞)

日本語版歌詞題名「星にいのれば」(三木鶏郎訳詞)

(作詞 N・ワシントン、作曲 L・ハーライン)

"Little Wooden Head" (Ned Washington & Leigh Harline)

"Hi-Diddle-Dee-Dee" (Ned Washington & Leigh Harline)

"I've Got No Strings"(Ned Washington & Leigh Harline)

「糸はもういらない」

"Give a Little Whistle" (N.Washington & L.Harline)

「口笛ふけ、ふけ」

"Turn on the Old Music Box" (N.Washington & L.Harline)

オーケストラ指揮 L・ハーライン ポール・J・スミス

なお、同年度アカデミー作曲賞も同時授賞している。

(作曲賞)「ピノキオ」(リー・ハーライン、ポール・J・スミス、ネッド・ワシントン)

VOICE (声の出演)

ピノキオ	(Dickie Jones ・ 佐々木清和)
ジペット	(Christian Rub ・ 三津田健)
ジミニー・クリケット	(Clif Edward ・ 坊屋三郎)
女神	(Evelyn Venable ・ 松田トシ)
狐のジョン	(Walter Catlett 三升家小勝)
ラムイック	(Frankie Darro ・ 畑 爽)
ストロンボリ・御者	(Charls Judels) (ストロンボリ・中村哲) (御者 ・古今亭今輔)
極楽島の呼び込み屋	(Don Brodie)

日本語版・・・オランダ娘・・・和田京子
フランス娘・・・富沢志満
ロシア娘 ・・・依田緑

コーラス・・・ダーク・ダックス、リズム・シスターズ
ジミニー・クリケットの歌・・宮本正
ピノキオの歌・・・宮下匡司

「オリジナル版公開当時の新聞、雑誌映画評特集」

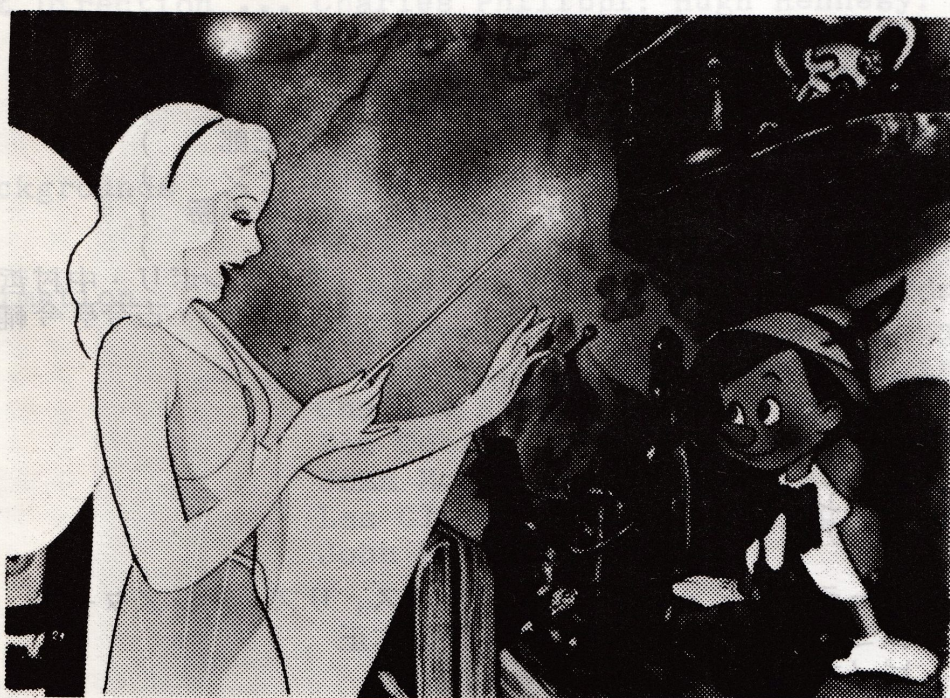
「ピノキオ PINOCCHIO（米・RKO）

これはウォルト・ディズニーの長編色彩漫画の傑作であり、最高の作品と見るべき映画である。映画の歴史家は、この作品の芸術的価値にふれないでは、映画史を書くことが出来ないであろう。ディズニーは、この作品によって、偉大な映画芸術家であるのみならず、映画芸術の天才であることを証明している。彼が素晴しい映画人であると同時に、素晴しい詩人であることに感嘆させられる。

原作者はイタリヤの童話作家コッロディー（1826〜1890年）であるが、この映画には、原作の有無を忘れさせるディズニーの独創性がある。これはディズニーの漫画詩であり、冒険詩である。

あやつり人形のピノキオは「願いかけ星」に生命を吹きこまれ、彼の良心となるコオロギのジミニーの言うことを聞いて、善と悪を識別し、善行を積めば本当の人間の子供にしてもらえることになるのだが、多くの誘惑に負けてついに半分はロバになってしまう。彼の良心であるジミニーの献身的な努力によって、ピノキオは、自分を作ってくれたお父さんのジペットを、クジラの腹の中から救い出すために、大活躍。報恩の善行が認められて、本当の人間の子供になり、ジミニーも金のクンショウをもらう。

これこそ、子供に見せてもいい映画と言うだけでなく、子供に見せるならこれだ、と推奨したい楽しい映画、立派な芸術的映画だ。

「サンデー毎日」昭和27年5月25日号より転載（水戸俊雄）

詩情もあり健全「ピノキオ」

「白雪姫」（一九三七年製作）「バンビ」（一九四二年同）「南部の唄」（一九四三年同）についで、日本に登場するディズニー長編漫画映画で一九四〇年の製作。

オモチャ好きなジペトじいさんに作られた男の子の木製人形はピノキオと命名されたが、天女の恵みで生命を与えられ良心に従って行動するようにといわれた。ところが誘惑にいくたびか失敗する。そうして人生勉強をしたピノキオは、最後にしっかりした良心を得て、本当の人間の子となるという話。

「白雪姫」「バンビ」が純然たる少年少女向きにつくられていたのに対し、これはもちろん子供にも面白いが、大人にも結構楽しめる。良心という知的なものに、全編を通じ豊かな詩情が流れているからで、中途半端な生きた能優映画よりはるかに味がよい。十二年前の作品でありながら天女など生きた人間をほうふつさせる。場面では「バンビ」の方が美しい。健全映画として安心してすすめられる。（猪飼）

昭和27年5月28日付「大阪日日新聞」より転載

漫画家（ろちゃん）の見たディズニイの漫画映画

「ピノキオ」と「短編漫画」評　南部正太郎

ディズニイが「白雪姫」に次いで作った長編漫画だが、製作された十数年前から世評の高かったディズニイの代表作だけあって戦後日本で公開された長編ものの中では一番面白い。

こおろぎの独白から始まるこのおとぎ話は操り人形の「ピノキオ」がいろいろと苦労を体験して、初めてこの世の生き方を知り、正しい批判力を身につけて、立派な人間の子供になるという物語だが、この有名なコッロディの原作をディズニイ一流の教訓と香り高い詩情を交えてそれこそ本当に楽しい夢の世界を美しく描き出している。

玩具作りの爺さんの家、チクタク動く奇抜な時計がうず高くおかれた部屋、お嬢さんのような美しい唇をパクパクさせながら金魚鉢の中から猫クンとキッスするミス金魚、そして窓から見た星空。

すべてが色彩魔術の跳梁に私たちの目はうばわれてしまう。へんな劇映画も顔負けのスピーディな動き、まさに漫画ブラボーを叫びたくなるような技術である。

漫画の画面を「白雪姫」のような単一平面構成からさらに多層平面の構成に飛躍せしめたこの「ピノキオ」の立体感は美しい派手な色彩とともにディズニイ漫画の画期的な進歩を示すものといえよう。（「短編漫画」評は省略）

昭和27年5月24日付「大阪新聞」より転載

ぼくの採点表

「ピノキオ」Pinocchio（米・色彩）☆☆☆☆　双葉十三郎　☆20点★5点

いままでに公開されたディズニイ長編漫画の中では私はこれが一番気にいっている。無邪気にいかにも漫画らしく作ってあるからだ。「白雪姫」は立派な作品ではあるが、歳月の歩みはおそろしく、何か色あせた感じだったし「バンビ」は成人の鹿のツラと動きと女教師みたいな声が気に入らず、画面の芸術的表現の努力は大いにみとめるが、着想の面白さは皆無だった。「南部の唄」はライブ・アクションの半漫画で、漫画の組合せがない部分は退屈した。所で今回の「ピノキオ」は、先ず物語が素直なお伽噺であり、我々も童心にかえって極く自然　いてゆける。換言すれば最もオーソドックスな作りで素直で平明である。表現もゲイジュツかぶれしない方をしてある。だから妙な所に感心すると言った機会には恵まれないが、のんびり楽しめるのである。勿論物語の展開に於て、金魚の扱いがくどいとか、秀れたギャグが不足しているとか言う不満もあり、いささかダレる部分もないではないが、途中で物足りなく思ったひともクライマックスの化物クジラの場面で機嫌を直すに違いない。このスピイドと迫力は見事である。

「スクリーン」昭和27年5月号より転載

外国映画評「ピノキオ」　岡　俊雄

〈・Pinocchio・RKO・ディズニイ一九四〇年度作品〉

「白雪姫」に次ぎ、「バンビ」に先立つ、ディズニイの初期の長編漫画。ストーリーは余りにも有名なイタリアの童話。物語的な要素は、今まで見たディズニイの長編中でもっとも豊富であり、変化に豊んでいる。そしてまた、大人の感情にうったえる寓意も多い。

そういう意味ではこの漫画はディズニイの作品のなかでもおもしろく観られた。一番おどろくのはピノキオが人形つくりの爺さんをたずねて海の中に入ってからの描写で、色彩も技巧も抜群である。大鯨が出現する場面に至っては、あらゆる漫画中の壮観だ。北斎の海さながらの怒涛としぶきの描写大鯨の量感――ここでは荒々しいタッチが素晴しい効果をおさめている。この最後の二巻には二十年のディズニイの動画研究の精髄が見られる。我々はそのボリュームに圧倒され、うなるだけである。ぼくの好みからいえば、ディズニイの全作品中で、若干の短編を除いて、最優秀作品にしたい一編である。途中がダレるのがちょっと辛い。ファースト・シーンの時計の描写なども楽しい。そして、全登場人物もそれぞれよく描けている。

「映画芸術」昭和27年4.5月合併号より転載

「ピノキオ」RKO

本で作られた人形のピノキオがさまざまの浮世の誘惑と闘って、本当の人間の子の魂を授けられるという有名な物語ほどディズニィ映画にふさわしい主題はない。なぜならばこのイタリア童話の描く勧善懲悪のモラルは、そのまま芸術家ディズニィの心情でもあるからだ。

ピーキオを作り、またそれに魂が入るように星に祈るジペトじいさんは善意と信仰、また初めは名声と金、次は快楽に誘惑されるピノキオは普通の社会人、キツネは偽り多き誘惑者、コオロギは良心を、それぞれ象徴する。そしてこの映画はコオロギの語る言葉（ナラタージュ）で展開する。

「白雪姫」につづく長編漫画の第二作だから前者よりも色彩が美しい。また主題がお得意のものだけにディズニィの豊かな想像力が前作よりも一層奔放にはたらき、特にジペトじいさん救出に海中を旅するところなどは、彼の数多い作品のなかでも傑出したものである。

イギリスの批評家たちがいうように、この作あたりからディズニィは平凡な美しさに妥協しすぎる。星の精はチョコレートの箱の少女のように美しく、コオロギの歌は甘美にすぎて詩味を傷つけている。しかし製作された一九四〇年当時の水準では当然A級に入れるべき作品だが、現代からすればB級。しかし漫画の概念をはなれて、大人にも十分楽しい作品である。原名 Pinocchio　（鳥海）

昭和27年5月25日付「朝日新聞」夕刊より転載

映画漫歩「ピノキオ」（アメリカ）

〔お話〕繰り人形のピノキオは折角、半分人間になったが、悪い狐と猫の誘惑に負けて学校を怠けて遊び暮し、とうとうロバになりかかる。しかし養父ゼペットを助けるために海の底へ潜り、鯨に呑み込まれた父を助ける。その善行に賞でて、ついに本当の子供になることが出来るというイタリアの童話の漫画化。色つき。

〔見所〕ディズニィが「白雪姫」の次に作った長編漫画映画。原作の波瀾万丈は大分簡単になり、その代りコオロギがピノキオの良心として大活躍する。「白雪姫」「バンビ」ほどの詩はないが、目も眩ゆい輝きなどを出して、芸術はぐっと進歩している。ゼペットの家の場面が特に面白い。

〔蛇足〕日本で一般にピノチオと言うのは最初の紹介者が誤読したための事でピノッキオが正しい。

〔寸評〕ゼイ沢なコドモ絵本。

「文芸春秋」昭和27年4月号より転載

スクリーン・ランド（読者欄）

「ピノキオ」を観て。実に表情がうまく、多少…漫画になりすぎた程、誠実な表現であった。ディズニイ御大の本心は先ずバッタのジミニイに結晶していて…、最初の方に、ジミニイが「ピノキオ」の本をめくり—「ある寒い夜」とやり出すと前の頁がずれて来る。……
そこでジミニイはあわてて……止めて……「失礼しました」……と言う。ここでもう、小生はうなった。バッタのジミニイが最高の演技を示している。アカデミイ級だ正に。ジミニイ！ジミニイ！今頃どこにいるんだい？

（神戸・ディズニイ分子）

「スクリーン」昭和27年9月号より転載

ブルウ・リボン（読者欄）

「ピノキオ」漫画は子供のみるものだナンテいわないで欲しいんです。それよりも僕は世の中の大人の人達が皆、ジミニー・クリケット君の様な良心をもって下さったならどんなにかタメになる美しい世界が来るだろうと思いました。"願い星"にそっとお祈りしましたよ。（ヨイコ クミ平）

「映画の友」昭和27年10月号より転載

「ピノキオ」映画評

佐久川克二

正直のところ、この作品に対する文句はたくさんある。日本の批評家達は馬鹿にこれをほめているが、僕はそんなにめちゃくちゃに買わない。「バンビ」や「白雪姫」より劣る様なことはないが、はるかによいとは思わない。まず同等だと思う。「白雪姫」は技術的に「ピノキオ」に劣っているが、ディズニーの優しさがあふれていた。「バンビ」は美しいストーリーも加えて技術的に完璧に近いような作品であった。僕は前の二作品にはそのような印象が強く残っているが、どうも「ピノキオ」は印象が散漫である。

原作はもちろんコッロディの「ピノキオ」であるが、これは完全なウォルト・ディズニー作品である。つまり、いくら岩波文庫版がいばっていようと、そっぽを向いても、いくらいにこれに独創的な作品である。ウォルト・ディズニーはコッロディから人物と筋を借りはしたが、彼の手にかかったピノキオはもっとすばらしいキャラクターであり、もっと今の子供たちにぴったりくる男の子である。

わがディズニーの偉さはそこにある。ディズニーはあらゆる美しいもの、すばらしいものを自分の作品の中に取り入れて、それをただの模倣以上の我物にしてしまう力を持っているのである。これはアイディアだけではないのはもちろんである。彼は自分の絵画の中にあらゆる絵画の型　を取り入れている。それで、彼の作品には、ラファエルもあるし、ゴッホもみられ、レンブラントも出て来る。もちろん東洋のものもそうである。「バンビ」の風にそよぐ秋の草むらは日本のそれである。

ウォルト・ディズニーの作品に出てくる人物(又は動物)は決って主人公よりバイプレイヤーのほうが良い、と言うのが今までの僕の考えであった。「白雪姫」なんか、どっちが主役だかわからないほどである。それがひとつの欠点だったかも知れない。

しかしその点、「ピノキオ」は優秀である。ピノキオはあれだけ活躍するジミニー・クリケットに、そう食われているような事はない。ピノキオは大変可愛いくてはつらつとしている。しかしバイプレイヤーが良いことはこの作品でも変りはない。フィガロも良いキャラクターである。ディズニーはこの作品以来、しばしば短編に登場させている。ディズニ一作品の人物が皆すばらしいのは、彼等の個性の魅力なのである。悪玉一人とり上げても、ただの悪者ではないのに注意してもらいたい。ストロンボリは実にいやなジプシーである。この大男はピノキオが詰しかけても、自分勝手な答はかりして金を数えている。狐のジョンも悪者だが、ずるさの中に、いくらかの小心者でさえある面をのぞかせる。狐のジョンは、いわば小悪党なのである。彼はウスノロの相棒ギデオンに自分のインテリ振りを表わすような口のききかたをする。ディズニーは彼の俳優たちに常に普通の人間のやり方を真似させている。このジョンがそうである。ジョンはっ知識の泉を汲みこむ」などと、えらそうな事を言うが、その実、ピノキオ

という名のつけりも見当がつかないのである。皆さんは、世間にこういった人間のいる事を知っているはずである。ディズニーはいつもこういう風にして人間の欠点をつつく。そう言えば、ジミニー．クリケットはこの映画においてはディズニーの最大の武器であろう。彼こそはディズニーの描こうとしているもの——不完全きわまる人間の心のシンボルそのものであるのだから。ジミニーのとる行動を一つ一つ拾ってみればよい。ジミニーは一応、ピノキオの劇団入りを反対するがその大成功をみて自分が間違っていた様な気がしてくるのである。

普通の人間にありがちの事である。女神様もたいしたミス・キャストをこしらえたもので、他人の良心どころか、もうひとりジミニーの良心も雇わないといけないぐらいだ。それにジミニーはちょっと好色的な男である。ピノキオにプンプンおこっていながら、カンカン踊りに目を丸くして眼鏡を取り出す。すぐ人形の女の子に色目を使う。そのくせ図々しくもないらしく、美しい女神様に顔を近づけられると、真赤になって照れる。又、ジミニー、クリケットは一種のサラリーマンである。ジミニーはジペットの家で女神様に顔を近づけられると、真赤になって照れる。又、ジミニはジペットの家で女神様に仕事をもらう。仕事とは、ピノキオの良心監視人なのであるが、彼はただ良心の何たるかを知っていただけで全然経験のない自信の持てないビジネスを持っていたわけである。しかし、ジミニーは素晴しい服と帽子と、それから成功したら、金のバッチをくれると言うのにつられて、それを引き受ける。つまり最初は誠意から良心を引き受けたのではないのである。ディズニーはそれを、たった一場面で明瞭に端的に現わしているのだから見事である。女神様が去ってから

・ジミニーは赤い壷に自分の素晴しい服をうつして上機嫌で鼻うたを唄っている。ピノキオがのぞきこむ。ジミニーは気がついて、我ながらあきれたという風にこう言う「おや、おや！右の事をすっかりわすれていたよ」そんな良心だから最初の一日から遅刻である。そして狐のジョンにピノキオをとられる。ジミニーの仕事の最初の失敗である。うかうかしていると女神様との約束が果せなくなる。そしてジミニーはだんだん良心役に誠意を持ってやり出すのである。そのジミニーの姿は不得手な仕事を失敗をかさねながらも一生懸命にやっているサラリーマンの上では独創的な人物である。コロディーの原作ではこういった複雑な人間描写がないことは言うまでもない。

　また、ジミニーにしても、狐のジョンにしても、彼等は全く現実的な人間だといえる。ディズニーの作品にこういった現実的な人間と非常にロマンチックな超現実的な性格を持った人物とが巧みに組合されている。「ピノキオ」の場合、その最たるものがジペット老人である。ジペットは全く底抜けの善人で全くの純真無邪気そのものである。同じ性格を与えられた人物に白雪姫がいる。(ピノキオはこういった人物の部類には入らないように思う。)ピノキオは非常に成功している。

映画の最大の楽しさの一つは映像であり、一つは音楽であり、色彩である。実写の劇映画では、これらはある程度まで制限を加えられた中でその楽しさを思い出すが、漫画映画の場合、それへの期待は無限に持っている事が出来、画面の創造は完全に近い自由を持つ。漫画映画にいたっては当然これが超現実へ足をのばすことになる。これは映像にも色彩にもおこり得る。どんな程度で足をとめるかということが楽しさか、あるいは不愉快さを感じさせるかの境となるのである。

二、三年来のワーナー漫画やユニヴァーサルのウッドペッカーなどを見ると、その色彩の大部分が原色＝赤色、濃緑＝である。なるほど画面がはなやかになる色だが、同時に疲れる不愉快さを感じさせる色である。しかしディズニーの作品は色彩においては絶対に確かである。最近の作品の色彩を語ることは出来ないが、今までに見た作品では全て満足以上のすばらしいものである。最初に色彩漫画を開拓したのがウオルト・ディズニー自身であるから当然だと思うかも知れないが、現在に至っても他社のこれについていけない事は、はなはだしすぎる。

実は最初「ピノキオ」を見た時、おやと思った。その色彩が今までの彼の長編と比べてスタイルが相当ちがっている。わりあいに派手である。

しかし今までの彼の長編「白雪姫」「バンビ」「南部の唄」と並べると、少しづつではあるが、すべてがちがったスタイルの色彩を彩されているのがわかる。この三本は中間色系統に統一したものであったが、「ピノキオ」は自由自在に原色を使っている。「ピノキオ」の色彩のよさは、二度、三度と繰返し見る事でわかってくる。素晴しい色彩である。

また、ディズニーは「ピノキオ」で非常に意識して色彩の見せ場を作っている。海底旅行や極楽島がそうである。これは前作「白雪姫」になかったもので、バンビには秋の紅葉や春の花などの目もさめるほどの美しい色の配色など美事なものである。

アクションの方も全く感心させられる。

あの魚の動きは、そのまま「白雪姫」の動物達の動きにつながっている。そして今度は地上ではなく、海中という空間である。海底での動きはスローモーションの味を出していて、動きの変化の上でも申し分なく良い。

この映画での最大のディズニーの腕の見せ場が、この海底旅行について、あの素晴しいモンストロの追跡である。短いカットを次々に重ねながら盛上げてくるスリルのアクションは見物である。最近これ以上にスリルに満ちた場面を見たことがない。すさまじい音響と、にぶい回転と、その水しぶきなどによって完璧に表現された化物鯨の巨体のヴォリウムがすごいスリルを生み出す。あのしっぽで一撃されたらどんなに頑丈な軍艦でもひとたまりもない事が、一言の説明もいらずに観客に通じる。そしてその説明には、ディズニーは別に奇手を使っているのではない。これはモンタージュによる正攻法なのである。ディズニーの作品が、会話や、ただのメカニズムのギャグによるコケオドシでない事が、これで歴然とするであろう。（私はアカデミー賞を受けたという、あの三

四本のフィンビイ作品やワーナの愚作を指しているのである。」あの白い水しぶきが一瞬モンストの巨体をかくしてしまってどこに誰がいるのやら、わからなくなる。これなどは非常にリアルな描写で、実写が生むスリルを造型芸術に使して、いかんなく活用しているのである。写実が生むスリル。これは大切である。ディズニーがことさらに鯨や波をリアルに描き、又、ピノキオがジペットを引っ張って海岸の岩穴に逃こもうとして、寄せて返す波になかなか入れないでいる描写などを写実的に描いているのはこれをよく知っていたからである。

まことにこの部分は凄い映画美にあふれている。ディズニー作品中でも最大の傑作かも知れない。これから見ると「バンビ」の鹿の決闘など馬鹿らしいようなものである。

もう一つ驚いた場面があった。ピノキオが動き出した朝、村の鐘が鳴りひびくと同時に、カメラはゆっくりパン・ダウンしていって子供達が学校へ行く情景を、子犬に転ぶ子や、鼻をかむ子、あひるの群などを入れて移動させて行く部分である。漫画映画の中でこれほど精密に人間を動かしたものを見たことがない。それもぜいたくなほどさりげなく右往左往させている。そしてこの場面からしばらくして狐のジョンや猫のギディが現われるのである。ディズニーの作品には常に、一人、少し足りないのが現われて画面を盗んでしまう。「ピノキオ」では猫のギディがそれである。このスタイルは前作「白雪姫」に抜け作が確立したものである。従って私達はこの愛すべきノータリンを「抜け作型」と呼んでいるが、ギディも確かに抜け作型である。私はギディの活躍を非常に期待していたのであるが、これはいささか思わしくなかった。ギディは間抜けで、のろまで、おまけに口が不自由だという点、非常に抜け作に似ている。しかし抜け作は無邪気な善人だった。ギディは悪党のジョンの手下である。良い事なのか、悪いことなのか、きっと判断がつかないのだろう。とにかく人を見ると木槌でなぐりかけたりする。こんな所が感じの良くない原因である。

また、この作品は子供達に対しては、立派な教育意義を持っている。わがまま勝手な子供がしだいに強くたくましくなって行くというお話からして教訓的な内容を含んでいる。そして会話にも少し耳の痛い注意があらわれている。遊んでばかりいたり、乱暴したりする子はロバになるという話を信じるような子はないとしても、その中から何か、良い事と悪い事の区別がわかってくるはずである。教育映画とはジジくさい、カビのはえたような画面に農家のいろりとかカカシが写るものばかりではないはずである。

先日、日本にディズニースタジオのカッテンゲという男が来たが、なんとこいつの仕事は英語の会話を日本語に吹き替えるのである。詳しい話は彼に譲るが、馬鹿な事はやめて、とっとと帰ってもらいたい。あの感じの合った声なしに「ピノキオ」「バンビ」は考えられないではないか。私はエド・ウィンの声を聞きたいのである。ジェリイ・コロンナの声も、ビング・クロスの歌も。

完

(1940年度アカデミー主題歌賞受賞)

When You Wish Upon a Star

Give a Little Whistle

Words by Ned Washington

Music by Leigh Harline

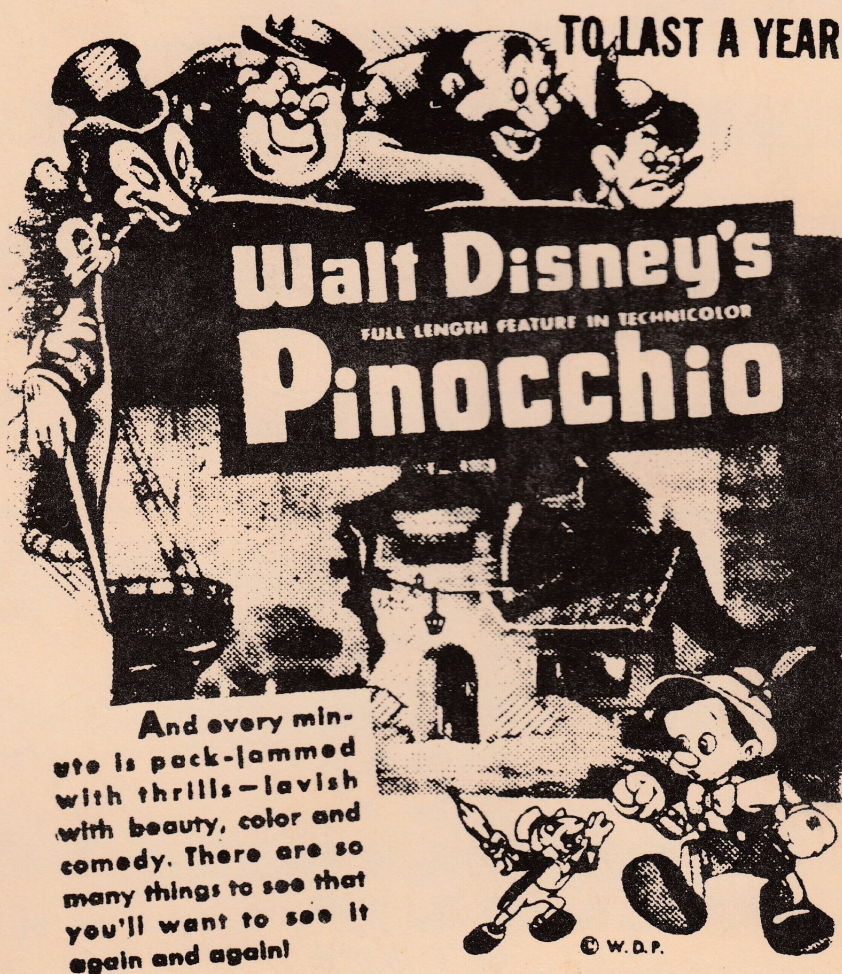
C7 8va F 8va
whis - tle! (Whistle) Give a lit - tle whis - tle! (Whistle)
Am Ddim Am E7 Dm E7
Not just a lit - tle squeak, Puck - er up and blow. And if your
Am Fdim C7 F Fdim
whis - tle's weak, yell, "Jim - i - ny Crick - et." Take the straight and
C7 F Fdim F F♯dim C7 8va
nar - row path And if you start to slide, Give a lit - tle whis - tle! (Whistle)
G♯dim D9 8va Gm7
Give a lit - tle whis - tle! (Whistle) And al - ways let your
C7 1. F F♯dim Gm7 C7 2. F
con - science be your guide. guide.

I've Got No Strings

Words by Ned Washington

Music by Leigh Harline

シナリオ採録……佐々川 克 二
広 江 武
監 修 ……渡 辺 泰
資料提供 ……渡 辺 泰（ＡＦＧ）
佐々川 克 二
広 江 武
表 紙 ……萩 田 憲 司
清 書 ……日 笠 真 喜
松 下 友紀子
タ イ プ ……藤 田 治 朗
真 鍋 昌 之
発 行 ……ＡＦＧアニメ・フイルムの会
製 作 ……ＨＡＧ阪神アニメーショングループ
発 行 日 ……昭和56年10月

ENOUGH ADVENTURE IN NINETY MINUTES
TO LAST A YEAR!
Walt Disney's
FULL LENGTH FEATURE IN TECHNICOLOR
Pinocchio
And every minute is pack-jammed with thrills—lavish with beauty, color and comedy. There are so many things to see that you'll want to see it again and again!
© W.D.P.

AFG&HAG

正　誤　表

	誤	正
P. 3 上段 後より2行目	佐々川売二	佐久川売二
P. 4 下段 前より1行目	「どの　も…	「どの棚も…
P. 11 上段 前より15行目	…フ　ガロも、	…フィガロも、
P. 19 上段 後より6行目	…銀の　で…	…銀の杖で…
P. 26 上段 前より6行目	ロバのヒジメ	ロバのヒヅメ
P. 33 下段 後より10行目	フ　ガロも…	フィガロも…
P. 51（奥付け）（3ヶ所）	佐々川売二	佐久川売二